

幻想の能力の使い手と 間桐の男

寂しい幻想の刀鍛冶

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある少女が死んだ。

普通ならそこで終わった筈の命。

しかし神の気まぐれにより転生する事に!?

これは東方Projectの能力を持った少女が行くFate／Zeroの物語。

目次

旧作

バーサーカーのステータス	1
第0話 始まりの狼煙	15
第1話 繰り返されていた誤解	21
第2話 夜に集いしサーヴァント	26
第3話 キャラ崩壊？する英雄王	31
第4話 救えなかった命	35
第5話 神父との出会い	41
第6話 酒盛りと暗殺者	44

第7話 バーサーカーの実力	50
第8話 終わる宴	56
第9話 狂化	61
第10話 炎の化身	66
リメイク	
第零話 プロローグ	70
バーサーカーのステータス	77
第壱話 始まりの狼煙	85
第弐話 夜に集いしサーヴァント	89
第参話 黄金の英霊	94
第肆話 キャスター陣営の末路	98

第五話	間桐家の日常	103
第陸話	戦闘に向けて……	107
第漆話	拠点攻め	110
第捌話	剣士と悪魔	114
第玖話	女への仕込み	118
第拾話	宴の準備	122
第拾壹話	集う王達	125
第拾貳話	夜の王の所以	129
第拾参話	アサシンの末路	133
第拾肆話	来訪者との戦闘	137
第拾伍話	戦闘の決着	141
第拾陸話	終わる宴	144
第拾漆話	暗躍するサーヴァント＋α	α

第拾捌話	聖杯戦争終了へのカウントダウン	149
第拾玖話	バーサーカーVSライダー (1)	159
第貳拾話	バーサーカーVSライダー (2)	163
第貳拾壹話	聖杯戦争終結	166
第貳拾貳話	エピローグ	172

旧作

バーサーカーのステータス

クラス：バーサーカー

真名：楓馬優奈（ふうまゆうな）

性別：女（森近霖之助時は男）

身長・体重：???（姿によって異なる）

属性：幻想

ステータス：筋力・耐久・敏捷・魔力は姿によって異なる（使用した話の後書きに記

載）幸運A、

魔力耐性A、宝具EX

特技：料理、掃除、手芸等の家事全般

好きな物：スライツ

苦手な物：魚介類

天敵：爬虫類

【宝具】

名前：ミニ八卦炉

対軍宝具

ランク：B

説明：大変貴重な金属である緋々色金製のマジックアイテム。卓上コンロ程度の炎から強力無比な魔砲まで幅広く放出可能。

名前：銀ナイフ

対人宝具

ランク：D

説明：綺麗に磨かれた銀で出来たナイフ。何本にも分かれる事が出来る。

名前：上海人形・蓬莱人形

対人宝具

ランク：D

説明：本物の人間と間違えるほど綺麗に作られた人形。壊れても一日経つと元に戻つ

ている。自立して行動する事も可能。

名前：楼観剣

対人宝具

ランク：C

説明：一振りで幽霊十匹分の殺傷力を持つ。

名前：白楼剣

対人宝具

ランク：C

説明：斬られた者の迷いを断つことが出来る。

名前：伊吹瓢（いぶきびょう）

対人宝具

ランク：D

説明：瓢箪の中に「酒虫」と言う水を酒に変える虫のエキスを染み込ませることによってただの水を酒に変える。なお出てくる酒は度数がかなりキツイ。壊れる事は無い。

名前：葉団扇（八手の葉）

対人宝具

ランク：C

説明：手に持っている扇。振ると風を起こす事が出来る。

名前：太陽の日傘

対人宝具

ランク：B

説明：日傘ではありえない程の強度を誇っており、例え剣での斬撃であろうと受け止める事が出来る。そして先端からはレーザーを撃つ事が出来る。

名前：死神の鎌

対人宝具

ランク：C

説明：魔力や呪いを斬り付ける事によって消滅・無効にする事が出来る。

名前：悔悟棒（かいごぼう）

対人宝具

ランク：D

説明：この棒に罪状を書き記すと、罪の重さによって重さが変わる。

名前：浄玻璃の鏡（じょうはりのかがみ）

対人宝具

ランク：C

説明：この鏡に罪人を映すと、その者の過去の行いが全て映し出される。

名前：緋想の剣

対人宝具

ランク：B

説明：相手の気質を霧に変え、霧はやがて「天候」となる。そして、その気質の弱点である性質を、みずから纏う。周囲の気質を極限まで萃め、ビームのように放つ事ができる。

名前：星熊盃

対？宝具

ランク：D

説明：注がれた酒のランクを上げる。一升入る盃で、注がれた酒は瞬時に純米大吟醸となる。

名前：宝塔

対軍宝具

ランク：C

説明：レーザーを放つことが出来る。ただし、よく手元から無くなる。

名前：雲山

対人宝具

ランク：C

説明：「入道を使う程度有能力」を使用する時に使う。入道の妖怪で意思が存在する。

名前：携帯型カメラ

対人宝具

ランク：D

説明：「念写をする程度の能力」を使う時に使用する道具。電力は無限である。

名前：仙人の簪

対界宝具

ランク：D

説明：「壁をすり抜けられる程度の能力」を使う時に使用する道具。あらゆる結界・壁に穴を開ける事が出来る。壊れる事は無い。

名前：月の扇子

対魔宝具

ランク：A

説明：森を一瞬で素粒子レベルで浄化する風を起こす事ができる。

【保有スキル】

名前：単独行動スキル

ランク：A＋＋

説明：マスターからの魔力供給が無くても行動することが出来る。

名前：主婦スキル

ランク：B

説明：転生する前に一人暮らしをして綺麗好きな性格も相まって掃除のスキルが上がった。仕事は保育園で働いていたので子供の対応や手芸、料理の腕も上がった為スキルとして昇華された。

名前：トラップスキル

ランク：A

説明：落とし穴やワイヤートラップ等を仕掛ける事が出来るスキル。絶対にばれる事のない罠を仕掛ける。

名前：酒勧め

ランク：A

説明：酒を勧められた相手は断る事が出来なくなる。

名前：幻想郷の住人

ランク：E X

説明：幻想郷に暮らして居る者達の姿になる事が出来る。さらにこの者達の能力を使用する事が出来る。その能力一覧は以下の通り。全てを使用するかは不明。

○どの姿でも発動可能な能力

- ・「主に空を飛ぶ程度の能力」
- ・「魔法を使う程度の能力」
- ・「闇を操る程度の能力」
- ・「冷気を操る程度の能力」
- ・「気を使う程度の能力」
- ・「火水木金土日月を操る程度の能力」
- ・「時を操る程度の能力」
- ・「運命を操る程度の能力」
- ・「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」
- ・「寒気を操る程度の能力」
- ・「人形を操る程度の能力」

- ・「手足を使わずに楽器を演奏する程度の能力」
- ・「鬱の音を演奏する程度の能力」
- ・「躁の音を演奏する程度の能力」
- ・「幻想の音を演奏する程度の能力」
- ・「剣術を扱う程度の能力」
- ・「死を操る程度の能力」
- ・「主に式神を使う程度の能力」
- ・「境界を操る程度の能力」
- ・「密と疎を操る程度の能力」
- ・「蟲を操る程度の能力」
- ・「歌で生き物を狂わす程度の能力」
- ・「歴史を喰い創る程度の能力」
- ・「生き物を幸運にする程度の能力」
- ・「狂気を操る程度の能力」
- ・「あらゆる薬を作る程度の能力」
- ・「永遠と須臾（しゅゆ）を操る程度の能力」
- ・「老いる事も死ぬ事も無い程度の能力」

- ・「風を操る程度の能力」
- ・「毒を操る程度の能力」
- ・「花を操る程度の能力」
- ・「距離を操る程度の能力」
- ・「白黒はつきりつける程度の能力」
- ・「紅葉と豊穰を司る程度の能力」
- ・「厄をため込む程度の能力」
- ・「水を操る程度の能力」
- ・「千里先まで見通す程度の能力」
- ・「奇跡を起こす程度の能力」
- ・「乾（けん）と坤（こん）を創造する程度の能力」
- ・「空気を読む程度の能力」
- ・「大地を操る程度の能力」
- ・「鬼火を落とす程度の能力」
- ・「病氣（主に感染症）を操る程度の能力」
- ・「嫉妬心を操る程度の能力」
- ・「怪力乱神を持つ程度の能力」

- ・「死体を持ち去る程度の能力」
- ・「核融合を操る程度の能力」
- ・「心を読む程度の能力」
- ・「無意識を操る程度の能力」
- ・「探し物を探し当てる程度の能力」
- ・「人間を驚かす程度の能力」
- ・「入道を使う程度の能力」
- ・「水難事故を引き起こす程度の能力」
- ・「財宝が集まる程度の能力」
- ・「魔力で身体能力を強化する程度の能力」
- ・「正体を判らなくする程度の能力」
- ・「念写をする程度の能力」
- ・「音を反射させる程度の能力」
- ・「何でも喰う程度の能力」
- ・「壁をすり抜けられる程度の能力」
- ・「雷を起こす程度の能力」
- ・「風水を操る程度の能力」

- ・「十人の話を同時に聞く事が出来る程度の能力」

- ・「化けさせる程度の能力」

- ・「感情を操る程度の能力」

- ・「何でもひっくり返す程度の能力」

- ・「何でもリズムに乗らせる程度の能力」

- ・「道具の名前と用途が判る程度の能力」

- ・「一度見た物を忘れない程度の能力」

- ・「光を屈折させる程度の能力」

- ・「周囲の音を消す程度の能力」

- ・「動くものの気配を探る程度の能力」

- ・「神霊の依代となる程度の能力」

力」

- ・「星を見ただけで今の時間が分かり、月を見ただけで今居る場所が分かる程度の能力」

○特定の姿でのみ発動可能な能力

- ・「水中だと力が増す程度の能力」 | わかさぎ姫

- ・「頭を飛ばせる程度の能力」 | 赤蛮奇

・「満月の夜に狼に変身する程度の能力」――今泉影狼
・「自ら音を発して演奏できる程度の能力」――九十九弁々・九十九八橋

第0話 始まりの狼煙

「……此処は何処かしら？」

周りに何も無い白い空間に一人の少女が立っていた。

「確か私は飲酒運転のトラックに轢かれて死んだはず……、ならば此処は輪廻の輪を潜る前の所なのかしら？」

『当たらずとも遠からずと言った所だな』

その声が聞こえたので少女は後ろに振り返った。

そこには『遊○王』のロキの姿があつた。

「貴方は……神か？ 私は『楓馬優奈』と言います」

『そうか、確かに私は神のロキだ。そして此処は転生の間だ』

「転生の間……と言う事はこれは所謂テンプレと言う奴ですかね？」

『そうそう、その通りだよ。まあ、此方のミスで死んでしまった訳ではないがな』

「と言うと……」

『まあ、神の気まぐれでお前を転生させる事になってな。その為に私が此処で転生させる為に来たと言う訳さ』

そう言うとロキはため息を吐いた。

「その神の気まぐれっていったい……」

『ああ、それは本当に気紛れなんだよ。死んだ奴から偶に此処に連れ込んで転生させるんだよ』

「そうなのですか……」

『さあ、そろそろ説明をして行くぞ』

「ええ、分かったわ」

『まずは転生する世界は……「Fate／Zero」の世界だな』

「あの命を懸けて戦う奴ですか」

『その通りだ。序でに言うとおバーサーカーとして行ってもらおうぞ』

「そ、そうですか……。生き残れるかな？」

『まあ、確かに生き残れる可能性は少ないが聖杯に触れてくれれば、こちらから受肉させる事が出来るからがんばってくれ』

「わ、分かりました」

『それじゃあ、次は転生特典は取り敢えず行ってみろ』

「……え？」

『この転生の特典は数じゃなく用量で決まっているからな。まあ、とにかく言ってみろ』

そう言われて考え込む楓馬優奈。

暫くして考えが纏まったみたいで・・・

「まずは狂化のステータスを無効に出来る様にしてください」

『それ位はまだまだ大丈夫だな』

「次に『東方Project』のキャラの能力をください」

『・・・全てでいいの？』

「うん、それをお願いします」

『これでほとんど使い切ったぞ』

「じゃあ「東方Project」のキャラ全ての姿になれるようにしてください。最初は

八雲紫の姿をお願いします」

『・・・うん、それなら大丈夫だな。流石にもう無理だがな』

「まあ、そうですね」

『後、受肉する時はその時なっていた姿で受肉するから。それと能力はその姿の能力しか使えなくなるから注意してくれよ』

「わかったわ」

『それじゃあ準備をするから少し待っていてくれ』

そうするとロキが色々と作業をし始めた。

暫くすると・・・

『よし、準備出来たぞ!』

するとロキの後ろに光の門が現れた。

『この門を通れば転生する事ができるぞ』

「分かりました」

そう言ううと楓馬優奈は門を潜って行った。

『行つたか。さて、それじゃあ私も彼奴らに報告しに行くかな』

そう言いロキは門を消して去って行った。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。されど汝は

その眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者

——」

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

魔法陣が光輝く。無数の蟲が蠢く間桐邸の地下室『蟲蔵』で、間桐雁夜が『バーサーカー』を召喚した。

「問いましょう。私を呼び、私を求めバーサーカーの座を依り代に現界せしめた召喚者、貴方の名前をここで問います。貴方は何者ですか？」

「バーサーカー……なのか？」

地べたに這いつくばりながら、己の召喚したサーヴァントを見上げる間桐雁夜。

「カッカッカ……随分と脆弱なバーサーカーを召喚したの、雁^Y」

気味悪い笑みを浮かべた老人、間桐臓硯がセリフを言い終わる前に塵となつて消えた。

「な、どう言う事だ。それに蟲達も消えている」

そう雁夜の言う通り蟲蔵の蟲が全て消えていた。

そして自身のサーバントであるバーサーカーの方に目を向けるとそこには間桐桜を膝枕しているバーサーカーが居た。

「さ、桜ちゃん!!」

「この子は大丈夫よマスター」

慌てる雁夜にバーサーカーが言った。

「そ、そうか・・・よかった。・・・いや！臓硯が！」

「ああ、あの気味の悪い爺さんなら殺してしまったわ」

「・・・へ？」

「ついでにこの子の中に入っていたのも消しといたから」

「そ、そうか」

安心した雁夜に対してバーサーカーは・・・

「それで、貴方は何者かしら？」

「あ、ああ、俺の名前は間桐雁夜だ」

「そう、私は風馬優奈。バーサーカーですわ」

こうしてバーサーカー陣営が結成された。

第1話 繰り返されていた誤解

「さて、この薬を毎日一錠飲みなさい。これを飲んでいけば貴方の体は元に戻るわ」
はあ、原作を読んでいて知ってはいたけどここまで酷いなんて思わなかったわ。

こういう時に「あらゆる薬を作る程度の能力」があつてよかつたと思えるわ。

「そ、そうか、分かった」

「さて、マスター。これからはどの様に動くつもりかしら？」

これを聞いて置かないといけない。

「そ、その前にお前のステータスは………な、なんだこれは!?! 出鱈目過ぎるじゃないか!?!」

まあ、確かに出鱈目な力を持っているからこのリアクションが妥当なのかしら？

「こ、これなら遠坂に勝てる!! ツガア!!」

「落ち着きなさい! まだ貴方の体は壊れかけているのだから!!」

「す、すまない……」

まったく、これじゃあ先が思いやられるわ。

「それよりその遠坂時臣の事だけど……」

「な、なんで彼奴の名前を知っているんだ……」

「私の保有スキルの一つよ」

すると雁夜君は私のステータスを確認してその項目を見つけたのか驚いた顔をした後にため息を吐いた。

「……本当にお前は出鱈目だな」

「続けるけど……もしかしたら私が消した蟲爺さんに騙されていたんじゃないかしら？」

「……何だって」

「あの蟲爺さんが間桐の魔術を詳しく知らない遠坂時臣に対して猫をかぶって甘い言葉を言っただんじゃないかしら？」

「……だったら何で桜ちゃんを養子として出したんだ!!」

「はあ、魔術の世界を本当に知らないのね。まあ、原作読んでいなかったら知らなかった私が言えた事じゃないけど……」

「それは桜ちゃんを守るためだったのよ」

「つどういうことだ!?!」

「それわね、魔道の家門を継げるのは原則1人だけなのよ。そうでない者で桜ちゃんのように希少で特異な能力を持っている者は日常生活を送るのが困難になる可能性が高いのよ。それに魔術協会に囚われて標本やモルモットにされる可能性も高いのよ。だ

から遠坂時臣は桜ちゃんを養子に出す事に決めたのよ」

「そ、そんな・・・そんな理由があったなんて・・・」

雁夜君が落ち込んでしまったわね・・・でいいのかしら。

まあ、自分の知識が足りなかった事で思い違いをしていたのだからそうなるかしら。

だけど・・・

「だけどマスターは悪くは無いわ」

「え・・・」

「しっかりと貴方に何で養子に出したのか説明しなかった遠坂時臣もまた悪いのだから」

「そうか・・・ありがとうバーサーカー」

「どういたしまして・・・っあ、そうそう」

私とした事がこれを渡し忘れていたわ。

「はい、これ・・・」

「これは何だい？」

「桜ちゃん用の薬よ。まあ私でも心は直す事は出来ないけど、体だけでも健康な状態にして置かないといけないからね」

「そうか・・・」

「それも一日一錠よ。しっかりと飲ませて置いてください」

「分かった。色々とすまないなバーサーカー」

「貴方は私のマスターなのだから当然です。・・・それじゃあ私は霊体化してるから何かあったら呼びなさい」

「ああ、了解」

その言葉を聞いて私は霊体化した。

俺は考えを改めた。

初め俺はバーサーカーを召喚した時、狂化がかかっていなかったから最弱だと思っていたが、それは間違いだった。

あの妖怪爺が一瞬にして殺ってしまったのだから。

これである時臣にも勝つ事が出来ると思っていたが、そこには俺の思い違いがあった事がバーサーカーの御蔭で分かった。

時臣は桜ちゃんを守る為に養子として出す事になっていた。

魔術教会から守るために・・・

だからバーサーカーに感謝が絶えない。

俺や桜ちゃんの為に薬を作ってくれたりもして本当に・・・
良いサーバントだな。彼奴・・・

第2話 夜に集いしサーヴァント

「マスター、体の方に異常は無いかしら？」

「ああ、お前の薬の御蔭で大分良くなつたよ」

「そう、良かったわ。だけでももう少し飲み続けて頂戴ね」

「分かったよバーサーカー」

あれから暫く経つたので雁夜の体も元の状態に戻つて来ていた。

「バーサーカー……分かつていると思うが……」

「分かつているわ。私達の目的は桜ちゃんを守る事。その為にもこの聖杯戦争を勝ち抜く」

「そうだ」

「私もそれは承知していますわ」

私は唯、聖杯に触れる事さえ出来ればいいからね。

と私が思っていると倉庫街に大きな反応があつた。

「マスター……」

「どうした？」

「敵サーバントが戦い始めたわ」

「何!?! 此処から近いのか?」

「いいえ、此処から遠い倉庫街よ。どうします? 行けと言うなら向かいますが・・・」

「了解したわマスター。一応この屋敷の周りには罠を仕掛けて置いたから大丈夫だと思うけど危なくなったら令呪で私を呼んで頂戴ね」

「分かった」

その返事を聞いて私は霊体化して倉庫街に向かった。

「我が名は征服王イスカンドル! 此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した!!」

周囲は、彼のマスターも含めて啞然となった。

「何を考えてやがりますか、この馬つ鹿はあああああー!?!」

イスカンドルのマスターの魂の叫びが響き渡った。

するとそこに一つの声が聞こえてきた。

『あら、面白いことになってるわね』

その声と共に蝙蝠が街灯の上に人の形を作り出ししていく。

そしてついには蝙蝠の翼が生えた少女になった。

「こんばんわ。私は今回の聖杯戦争でバーサーカーとして現界した者よ」

その少女の言葉に周りの者達は驚いた。

「何ですって!?!」

「貴様を、嘘を付くな!」

「何故狂戦士が言葉を話せている!?!」

「な、なんだった?!」

「ほう、面白い奴よのおう」

それぞれの反応を見たバーサーカーは答えた。

「まあ、特別に教えてあげるわ。それは私自身のスキルで無効にしているからよ、征服王
イスカンダル、騎士王アルトリア・ペンドラゴン、フィアナ騎士団の一人であるディル
ムツド・オディナ……」

バーサーカーの返答に各陣営は驚いた。

イスカンダルはともかく他のサーバントは真名を言っていないのに当てられたから
である。

「何故私達の真名が分かった!？」

そのセイバーの質問に対してバーサーカーはため息を吐いた。

「はあ、それくらい自分で考えなさいよ。貴方も一応王でしょう」

「っ、ぐぬう……」

「おい、お前さん。我が軍に来んか?」

この空気を読まずにイスカンドルはバーサーカーに問うた。

そのイスカンドルの行動にバーサーカーはまた、ため息を吐いた。

「はあ、お前……空気の読めない奴と言われた事があるだろう」

「お、よく分かったのう。確かにあるぞ」

「はあ、(真面目に相手するだけ無駄か)。まあその誘いは断らせて貰うわ」

「そうか、それは残念じゃのう」

その時イスカンドルのマスターが声を上げた。

「な、なんだこれ!？」

「む?どうした坊主」

「こいつのステータスが見えないんだよ!？」

その言葉に対してバーサーカーはその事かという反応をした。

「そのことは秘密よ」

「まあ、そりやそうだろうな」

イスカンドルとて何でも答えてもらえとは思っていない。

「まあ、そろそろもう一人にも出てきて貰おうかしら？」

「む、どういふことだバーサーカー？」

「貴方達の戦いに気付いて来たのが私とイスカンドルだけではないということよ」

そういうとバーサーカーは自身が立っている逆側の街灯の方を向いて言った。

「そろそろ出て来たらどう。英雄王ギルガメツシュ……」

その言葉の少し後に黄金のオーラと共に一人の男が現れた。

「ほう、我が名を知っているとは、中々見所がある様な女」

そう、この男こそ英雄王ギルガメツシュなのである。

第3話 キヤラ崩壊？する英雄王

「だが女、我と同じ目線に立つとはどう言う了見だ」

ギルガメツシュがそう言いバーサーカーを威圧するが、その本人は涼しい顔をしてい
る。

「あら、八百長をする王に対する礼儀など無くってよ」

その言葉にギルガメツシュ以外の者達は反応した。

「どう言う事ですバーサーカー？」

「あら、気付いてなかったの？まあ教えてあげるわ。アサシンがまだリタイアしていな
いと言う事よ」

「何!？」

「何だ?!？」

驚く皆を余所にイスカンドルはバーサーカーに問うた。

「何故そう思ったのだ」

「何故ってこの場を見ているからよ？」

『『っはあ!?!』』

その場にいる皆が驚いた。何故なら・・・

「な、何故アサシンの存在に気付けるのだ!?!」

「それ言うなら何でギルガメツシュがアサシンに気付いたのかと言う疑問は出ないのかしら?」

『『・・・っあ!?!』』

またその場の皆が驚いた。息ピツタリである。

「そうだよ、何でこの違和感に気付かなかったんだよ僕は・・・」

「確かにそうなのう」

「何故気付かなかったのかしら?」

皆がそれぞれの反応をする中バーサーカーは話しを続けた。

「まあ、その時のアサシンを殺る時を見たから彼奴の名前が分かったのよ」

そう言いバーサーカーはギルガメツシュの方に顔を向けた。

「まあ、理由としてはこんなものよギルガメツシュ」

「ふん、時臣の奴あんなに息巻いて置きながらすぐにばれているではないか」

「アンタのマスターが余程の馬鹿か、うっかり属性でも持っているのかもしれないわよ?」

その言葉にギルガメツシュは考え込む。

「ふむ、確かに後者はあり得るかもしれない」

「まあ、今回のアサシンが分身したりできる部類なのかしらギルガメツシュ」

「ああ、その通りだ女」

敵であるバーサーカーに自身のマスターの作戦をあつさりとはらしてしまいうギルガメツシュ。それでいいのか。

「随分とあつさりばらしたわね。余程今回の八百長が気に入らなかつたの？」

「その通りだ！王であるこの我が虫の始末をさせられたのだからな!!」

そう言い怒るギルガメツシュにバーサーカーは言った。

「だったらその怒りを貴方のマスターにぶつけて来たらどう？」

「そうだ、その手があつたな!?!いい案だ女！それでは早速ぶつけに行くとするか!!」

そう言いギルガメツシュは霊体化しその場を去った。

そして場には微妙な雰囲気包んだ。

その空気の中バーサーカーは言った。

「さて、貴方達はこれからどうするの？」

その質問の後にすぐに声が聞こえて来た。

『ランサー、今宵はここまでだ。撤退するぞ』

「了解しました、マスター」

そう言いティルムツドは霊体化しランサー陣営はその場を去った。

「さあ後の者達はどうするの?」

「ふむ、今宵は帰るか坊主」

「あ、ああそうだな。この空気じゃ少しやり難いし・・・」

「それじゃあ余達はこれで失礼するぞ。ハイヤア!!」

「ウウウアアアアアアアアア——?!?!?!」

イスカンドルのマスターの叫び声を残してライダー陣営は去って行つた。

「残つたのはセイバー一人だけど、どうする?このまま今日は終わる?それとも戦う?」

「今日は帰るとしまししようセイバー」

「わかりました」

「そう、それじゃあ私も帰るとしますか。それじゃあね」

そう言いバーサーカーは霊体化して去って行つた。

「今回の聖杯戦争、荒れそうね」

「そうですねアイリスフィール」

その会話を残してセイバー陣営も去って行つた。

そして今回の聖杯戦争の最初の戦闘は微妙な感じに終わったのであった。

第4話 救えなかつた命

屋敷に戻ったバーサーカーの指先に虫が止まっていた。

「そう、セイバーとキャスターが接触したの。それにランサー陣営が拠点としていたホテルが爆破解体されたのね。そして、キャスターが非道な事を繰り返していると・・・」
虫からの報告を聞いたバーサーカーは考え込んだ。

「なるほどね。だったらもうすぐあのイベントが起こるわね。だけどそのイベントは阻止するわ) ありがとう、今度はアインツベルン城とキャスターを中心に見張って置いて頂戴」

バーサーカーがそう言うのと虫は飛び去って行った。

その場にバーサーカーのマスターである雁夜がやって来た。

「今回はどうだった？」

「どうやらキャスターが子どもを拐って自身のマスターと共に非道なことをしているようです」

「な、なんだと!？」

「詳しい言いますと子どもを死ねない状態にして身体を弄くっているようです」

「そ、そんなことが起きていたなんて・・・」

「この行動は聖杯戦争のルールを破っています。いずれ教会から討伐の命令が出るでしょう」

そうバーサーカーは言うが・・・

「だけど・・・その前に私はキャスターに攻撃を仕掛けたいわ」

「ああ、俺もその気持ちだ。行け、バーサーカー!!」

「了解!」

マスターの指示を聞いてバーサーカーはキャスターの下に向かった。

夜の川の横にある下水道。

そこにバーサーカーは居た。

「そう、この先にキャスターとそのマスターが居るんだね。もう下がって良いよ。ここからは危ないから」

自身に報告していた虫はバーサーカーに下がる様に言われると飛び去って行った。

そしてしばらく進んだところでバーサーカーは立ち止った。

「なるほど、確かにこの先にいるようだね。だけどこれは少し防衛にしては荒すぎないかしら？」

そう、バーサーカーの前に海魔が地面が見えない位に這いつつていた。

「だけど私の前では無力よ」

そう言うのと自身の周りに無数の蝶を飛ばし海魔の方に向かわせた。

そして、海魔が蝶に触れると海魔の体が生命を失ったように倒れた。

「その蝶は死をもたらず蝶よ。触れれば死ぬわ。まあ、聞こえていたらただけだね……」

そうバーサーカーが言い終わる頃には海魔は全て死んでいた。

そしてその中をバーサーカーは歩いて奥へと向かった。

その直後のキャスター陣営は……

「ふお！こ、これは……」

「どうしたの青髭の旦那？」

「龍之介！此処を離れましょう！此処にいては危険です!!」

「え？で、でもこいつらは……」

そう言い龍之介は攫って来た子供達を指したが……

「そんなもの幾らでも替えが効きます！いち早くここから離れましょう!!」
「わ、わかったよ。青髭の旦那」

その会話を最後にキャスター陣営はこの場を去った。

「つち、遅かったようね」

バーサーカーがキャスター陣営が居たであろう所に着いた時にはキャスター達は去った後だった。

「なるほどね。相手の実力が分かるほどの理性は残って居た様ね」

「そう言い周りを見渡すとまだキャスター達に手を出されていない子供達が倒れていてた。」

「よかった、まだ無事な子供達が居たのね」

「そう言うとバーサーカーは目玉が沢山あるスキマを開いた。」

その奥をよく見るとそこには交番があった。

そして、交番の前に小さな風の渦が起こっていた。

そのスキマに寝ている子供達を入れていく。

向こうでは風の渦によって地面に強くぶつからずに、地面に優しく降ろされていた。

そして、全員の子供を入れ終わるとバーサーカーはスキマを閉じた。

「これで良し。後は……」

バーサーカーは静かに振り返った。

そこにはキャスター達によって見るも無残な姿になった子供達が死ぬ事が出来ずに苦しんでいた。

「ごめんね、私がもう少し早く来れていれば貴方達がこんなに苦しむ事は無かったのに……」

そう言うのと先程海魔に使った蝶を飛ばし始めた。

「私の薬でもこれは直すことは出来ないわ……。せめてこれ以上苦しめない様に……殺してあげる」

そう言い蝶を飛ばしバーサーカーは子供達から目を逸らした。

その間にも蝶は飛んで行き、子供達から生命を奪った。

その時、一匹の虫がバーサーカーの前まで飛んで来た。

「……如何したの？此処は危ないっていたのに……。そう、アサシンのマスターが教会の外に出たのね」

虫からの報告を聞きバーサーカーは少し考え……

「ありがとう、引き続き各陣営を見張って置いて頂戴」

その言葉を聞き虫はその場を飛び去って行った。

「さて、私も行くとしますか・・・」

その言葉を残してバーサーカーもその場を去った。

第5話 神父との出会い

「何故だ、何故彼奴はあの様に戸惑う事無く人の命を奪える．．．」

言峰は自身の在り方と同じものを感じた切嗣の事を考えながら教会の外を父に黙って歩いていった。

「時臣師の作戦もあのバーサーカーで潰されてしまったのだったな。何故か彼奴と話しをしたら私の事が分かる様な気がする．．．」

「その様な期待を貴方にされるなんて思ってもいなかったわ」
突如聞こえた声に警戒しながら言峰は声のした方を向いた。

「あらあら、そんなに警戒しなくてもいいのよ?」

そこには一つの目玉を胸元付近に浮かばせている一人の少女が居た。

「(何者だ?)」

「ああ、この姿は初めてだったわね。私はバーサーカーよ」

その言葉に言峰は内心驚いた。

アサシンを通して見ていたバーサーカーと姿が全く違ったからである。

「．．．お前がバーサーカーだとして、何故あの夜と姿が違うのだ」

「ああ、これは私がバーサーカーとして呼ぶ事が出来る理由の一つよ。私は姿を変える事が出来るのよ」

「成程な……（いや待て、私は先程の考えは声に出していなかったはず。なのになんで分かったのだ？）」

「それは秘密よ。自分で考えなさい」

「……成程、深く考えない方が良さそうだな」

そう言峰は思い至るとバーサーカーの目を見て言った。

「それで、私の事はお前には分かるのかバーサーカー？」

「ええ、貴方ほど分かりやすい人は居ないわよ」

「何だと……」

「自身の事は自分では分かり難いものだから仕方ないつちやあ仕方ないのだけれど……」

まあ、教えてあげる」

そう言いバーサーカーは言峰に胸元付近に浮いている目玉を向けた。

「まあ、先ずは私の質問に答えて頂戴」

「？……分かった」

「先ず一つ目、他者の感情を理解できない事はあるかしら」

「……ある」

「二つ目、他人に自身の感情を理解された事はあるかしら？」

「・・・ない」

「最後よ、目の前に見ず知らずの人が苦しそうにしている。貴方はどの様に行動するか
しら？」

「・・・私は神の信徒なのだから助けるべきだろう」

言峰の全ての回答を聞いてバーサーカーは確信した様だ。

「これで確信したわ。貴方は・・・他人の傷を弄つて喜びを感じる人間の様ね」

「っな!? 貴様、私とその様な罪深き者だとしても言うのか!？」

「落ち着きなさい。ちゃんと証明してあげるから・・・」

そう言うのとバーサーカーの胸元付近を飛んでいた目が光り始めた。

「想起」「覚醒する本当の自分」。次に目が覚めた時には貴方は己の在り方を理解しているわ。まあ、聞こえていないようだけど・・・」

そう言うのとバーサーカーは立ち尽くしている言峰を放棄しその場を去った。

第6話 酒盛りと暗殺者

「世界はこの様に美しかったのか……。パーサーカーには感謝しなければ……」

「これが、起きた言峰が最初に発した言葉だった。」

「だが、聖杯は時臣師に譲ろう。それよりも見たいものが出来た。私は……人が苦しんでいるの見てみたい」

その時の言峰の顔は憑き物が落ちた様な清々しそうな顔をしていた。

「さて、先ずは教会に戻って秘蔵のワインを飲むとするか。今なら美味しく飲める気がする……」

「そう言い言峰は教会に戻って行った。」

次の日の夜……

教会からキャスター陣営以外の全陣営にキャスター討伐の依頼が入った。

「やっぱり出たわね、討伐依頼……」

「そうだな。まあ、アジトにしていた所をお前が攻撃したから暫くは動かないんじゃないかな？」

バーサーカー陣営はキャスターの事を話していた。

「いいえ、そうとは限らないわ」

「どう言う事だバーサーカー？」

「キャスターの作っていたアジトは周りに海魔を置いていただけの物だったから、作ろうと思えばすぐ作れてしまうわ」

バーサーカーの説明を聞き、雁夜は納得した。

「なるほどな」

「まあ、他の陣営は積極的に討伐に参加しないだろうけどね・・・」

「どう言う事だ？」

「皆が皆、キャスターの為に力を消耗した所を倒そうとするかキャスターとサーバントが戦っている間にそのサーバントのマスターを殺そうとするからよ」

「はあ、これが戦いなのか・・・」

そう雁夜が言うのと虫がバーサーカーの肩に止まった。

「あら、どうしたの？・・・え、そうなの？・・・そう、分かったわ。引き続きお願いね」
そうして虫が去ってから雁夜が聞いた。

「何かあったのかい？」

「どうやらライダーがアインツベルン城に向かったみたいね。ちよつと行ってくるわね」

「そうか、分かったよ。行つておいで・・・」

「ありがとうございますマスター」

そう言いバーサーカーはアインツベルン城に向かった。

アインツベルン城の中庭。

そこにライダーとセイバー、アーチャーの三人が酒盛りをしていた。

そこに新たなサーバントが現れた。

「あら？楽しそうじゃない。私も酒盛り混ぜて頂戴」

「む、お前さんは何者だ。我には見覚えがないが・・・」

「ああ、この姿では初めてだったわね。私はバーサーカーよ」

その言葉に周りの者達は驚いた。

「なんと、それは真か？」

「そうよ」

「そう言い座ったバーサーカー。」

「私は特定の姿に変わることができの。これが私がバーサーカーとして召喚された理由の一つよ」

「なるほどな。姿が狂っているという訳か」

「そう言い事よ。それよりギルガメッシュ、マスターへの悪戯はうまくいったかしら？」
「ああ、それはうまくいったぞ！時臣の奴、面白い反応をするから止められずに毎日続けて居るぞー！」

「そう、楽しそうでよかったわ。そしてセイバーとアイリスフィール、こんばんわ」

「あ、ああ・・・」

「こ、こんばんわ・・・」

「そう言われながらバーサーカーは瓢箪と杯を取り出した。

「む、それはなんだ？」

「これ？これは星熊杯と私が持って来た日本酒よ」

「ほう、我にも一杯くれ！」

「構わないわよ。ほら、杯を寄せなさい」

「ほれ！」

そう言い差し出された杯にバーサーカーは一度星熊杯に潜らせてからライダーの杯に入れた。

「おい、何故その杯に一度入れてから注いだのだ？」

「ああ、この星熊杯は酒のランクを一つ上げてくれるのよ」

「なんと！それは真か!!」

「ええ、試しに飲んでみなさい」

そう言われライダーは注がれた酒を飲んだ。

「っプハア！こりゃあ美味い！」

「それはよかつたわ。ほら、その二人も飲みなさい」

そう言いバーサーカーは他のサーバントの二人に先程と同じ様に酒を注いだ。

「む、済まない」

「あ、どうも」

そして、二人は酒を仰いだ。

「っ美味しいな・・・」

「確かにこれは美味しいですね」

『『むっ?』』

二人はいつの間にか酒を仰っていたのに驚いた。

その反応を見てバーサーカーは言った。

「ああ、貴方達が断らずに酒を飲んだのは私のスキルの一つの所為よ」

『『何?』』

「そのスキルは私が勧めた酒を断る事が出来なくなるスキルなのよ」

「ほう、そうなのか」

「何とも微妙なスキルだな」

「戦いには使えませぬね・・・」

それぞれの反応を見てからバーサーカーは城の上の方を見て言った。

「さて、そろそろ出て来たかどうかしら? 貴方達・・・」

「どう言う事だバーサーカーよ?」

「私達の事を覗き見している者がいると言う事よ」

「何と! それは真か!!」

「ええ、そうでしょうアサシン」

そのバーサーカーの言葉と共に周りに大量のアサシンが現れた。

第7話 バーサーカーの實力

「な、なんだこの数のアサシンは?!」

『我らは軍にして個のサーバント、されど個にして軍の影』

ライダーのマスターの驚きにアサシンは答えた。

「つまりはあのアサシンは多重人格でその人格の数だけ実体を作る事が出来るという事
よ」

「なるほどな。アーチャーよ、これはお前が仕組んだ事か?」

「ふん、我はこの様な美しくない事など命じはしないわ」

「それでは貴様のマスターの命令か」

「どうやらその様ね・・・」

「お前からそんな呑気に話してる場合じゃないだろ!」

のんびり話をしているサーバント達にキレるライダーのマスター。

その言葉にライダーは動いた。

「まあ落ち着け坊主、器の大きさも王として必要だぞ。さあアサシン達よ、共に語ろうという者はここに來て杯をとれ。この酒は貴様らの血と共にある」

その言葉に対してアサシンは柄杓を斬り裂くという行動で答えた。

それにライダーは・・・

「……………余の言葉、聞き間違えたとは言わさんぞ？ “この酒”は“貴様らの血”と言った筈。そうか、敢えて地べたにブチ撒けたいというのならば、是非もない……………」

そうしてライダーが動こうとしたがバーサーカーがそれを止めた。

「待ちなさいイスカンドル」

「なんだバーサーカー、今我はこ奴らにお仕置きをしようと思っておるのだが……………」

「それを私に譲りなさい」

「なんだと?」

「私も頭にキテるのよ。私は酒を大事にしない奴は大嫌いなものよ……………」

その言葉と共にバーサーカーからとてつもない殺気が放たれ始めた。

その殺気を受け、ライダーは素直に下がった。

「わ、わかった……………」

「ありがとうイスカンドル。さくて、久しぶりに本気でいかせて貰うわよ」

バーサーカーがそう言った瞬間に、アサシン達の目の前には銀のナイフが大量に投げられていた。

『『『っな!?!』』』

アサシンは驚きながらも自身の持つダガーで弾いて対処した。

だが、対処できずに二人のアサシンが消えた。

「あら、意外と対処できるようね。だったら、上海！蓬萊！」

「シャンハイ！」 「バカジャーネー！」

バーサーカーの呼び声に答えて二つの人形が現れた。

さらに右手に大きな団扇の様な葉を出した。

「行きなさい上海！蓬萊！」

「シャンハイ！！」 「マカセナサーイ！！」

「そして、これでも喰らってなさい！」

二つの人形がそれぞれ魔力で出来た弾幕をアサシン達に放ち始めた。

そしてバーサーカーは手に持っている葉で無数の鎌鼬を放ちアサシン達を攻撃し始めた。

その攻撃によりアサシンは首や腕、足が斬り飛ばされていたり、吹っ飛ばされたりして消されていく……

遂にアサシンは一人になってしまった。ちなみにそのアサシンはアサ子の事です。

「後はあなた一人よ」

「シャンハイ！！」 「ホウライ！」

「ツク!?!」

「最後は派手に終わらせてあげる・・・」

そう言うのと葉を消すと木で出来た道具を持った。

「これで終わりよ」

「喰らう分けn「シヤンハイイ!」「バカジャネーノ!」ツしまった!?!」

バーサーカーの攻撃を躲す為に動こうとしたアサシンを二つの人形が魔力でできた糸で拘束してそれを阻止した。

「喰らいなさい!マスタースパーク!!!」

木でできた道具から極太のレーザーが放たれ、アサシンは悲鳴を上げる事が出来ずに力に飲み来られて消えていった。

アサシン、ハサン・サツバーハ。バーサーカーに蹂躪されて・・・死亡!!
リタイア

「ふう、これで終わりね」

そう言いながら二つの人形をしまい、酒盛りをしていた所に座るバーサーカー。

「お主、色々な物を持っている様だな」

「まあね。いい運動になったわ」

「お主、やっぱり我の所に来ないか!」

「何度言われようと答えはNOよイスカンドル」

「そうか、でも諦めきれんのう・・・」

自身の誘いを断られても諦めないライダーにバーサーカーがため息を吐いた。

「はあ、厄介なのに気に入られたみたいね」

そう言いラッパ、ピアノ、ヴァイオリンを出した。

するとその楽器が宙に浮きながら勝手に演奏し始めた。

「お、おい、何だよそれ・・・」

「え、ああこれの事？これは私の力で動かしているだけよ」

「どんだけハイスペックなんだよ此奴・・・」

バーサーカーの答えにライダーのマスターは改めてバーサーカーの異常なスペックに驚いた。

「ほう、意外と気が利くではないか女」

「ありがとう、そう言えばギルガメッシュ」

「なんだ？」

「アサシンのマスターの言峰綺礼はどんな感じにしているかしら？」

「ああ、彼奴か。彼奴は我が時臣を弄る時に一緒にやったりして、時臣の苦しむ様子を見て笑っていたぞ」

「そう、楽しんでるなら良いわ」

「・・・女、彼奴があの様になったのはお前が何かやったからか？」

「そうだけど、それがどうかしたかしら？」

「いや、彼奴が気付いていないものを我自身が教えてやろうと思っていたからな、手間が省けた」

「そう、それは良かったわ」

「そう言いバーサーカーは酒を仰った。」

第8話 終わる宴

「それじゃあ、話しを続けましょうかイスカンドル・・・」

「そうじゃな、続けるとするか」

そう言いライダーは酒を仰り言った。

「それじゃあ、それぞれ自身の願いを語ろうではないか」

「イスカンドル、一応言っておくけど私は王じゃないからね」

「それでも良いわい」

「そう」

「先ずはお前から言ったらどうだ。征服王よ」

「うむ、それもそうじゃのう。我が願いは受肉だ!!」

『・・・・・・・・・・はあ!?!』

ライダーの言葉にバーサーカー以外は驚いた。

「お前、世界征服するのが願いじゃないのかよ!!」

「バカもん。その様に世界を手に入れてもつまらないであろうが」

「ふふ、私は貴方らしい答えだと思うけど?」

「確かに、こ奴から感じるオーラはその様な感じだな」

「次はアーチャーよ、お前は何故聖杯を求めたのだ？」

その質問にアーチャーは当然というように答えた。

「それは聖杯は我の物だからだ」

『……はい？』

「これまたバーサーカー以外は驚いた。

「聖杯など知らないが宝であるからには自分のものに違いないのだ！」

「はあ、流石は最古の英雄にして最強と言われているだけの事はあるわね。趣味でお宝

集めでもしていたの？」

「ああ、確かにしていたがそれがどうした？」

「だったら貴方の理由は聖杯と言うお宝を自身の物にする為に参加したじゃないの？」

そう言われてアーチャーは少し考えると答えた。

「確かに、昔集めきれていなかったのかもしれないな。だったら我の理由はそれにしよう」

「そうか、お主は趣味の為に参加したのか……。それじゃあ、セイバーよ。今度はお前

の番だぞ」

そう言われ、待っていたという様にセイバーは言った。

「私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望機をもってして、ブリテンの滅びの運命を変

える。それが私の願いだ」

その言葉に周りの皆は驚いた。バーサーカーすら驚いていた。

「それはダメよ、セイバー……」

「どう言う事だバーサーカー……」

「今回はその女の言う通りだぞ、セイバーよ」

「その通りだぞ、セイバー」

セイバー以外の三人のサーバントがセイバーの意見を否定した。

「セイバー、過去を変える事はやってはいけない事なのよ」

「何故だ！私は国の民を思ってる！」

「過去を変える事で今、この現代を生きている人々全ての人生が犠牲になったとしても？」

「なんだと？」

分からないという様な顔をしたセイバーにバーサーカーは説明した。

「タイムパラドックスをいつているかしら、セイバー？」

「知らない、何の事だ？」

「タイムパラドックスというのは過去に対して干渉したことにより違う未来になってしまう事よ」

「それで良いではないか」

「貴方は馬鹿かしら？ そうなったらいけないのよ」

「それは何故だ！」

「じゃあ、今の人達はどうなるのかしらね？」

「それは・・・っは！」

「漸く理解した様ねセイバー。そう、今の人達は過去が変わった事により、死んでしまったり、生まれなかったりという矛盾が生まれてしまうのよ」

「それでも・・・私は・・・」

ぶつぶつ呟いているセイバーを見てアイリスフィールは心配して駆け寄った。

その様子を見てバーサーカーはため息を吐いた。

「はあ、今回はこれまでにしましょうか。イスカンドルにギルガメッシュ？」

「そうだな。今宵は仕舞にしようかの」

「ふん、そうだな」

そう言いライダー、アーチャー、バーサーカーは立ち上がった。

「おっとそういえばお前さんの願いを聞いていなかったの、バーサーカーよ」

「そう言えばそうであつたな」

「・・・私の願い事はイスカンドルと同じ受肉よ」

そう言うとバーサーカーの体が散ってその場から姿を消した。

「おい、坊主。我らもそろそろ帰るぞ」

「あ、ああ……」

ライダーもマスターを連れてその場を去った。

「ふん……」

アーチャーは最後にセイバーを一目見ると霊体化しその場を去った。

「私は……私は、それでも……」

「落ち着いて、セイバー!!」

そしてその場には死んだ魚の様な目をしてぶつぶつぶやいているセイバーとそれを元に戻そうとしているアイリスフィールが残っていた。

第9話 狂化

アインツベルン城で事が会ってから一日経った夜。

「雁夜・・・」

「どうしたバーサーカー？」

「川の方から膨大な魔力を感じるわ。多分キャスターの仕業だと思うわ」

その情報を聞き雁夜はバーサーカーに言った。

「そうか、だったら向かってくれバーサーカー」

「了解しましたわ」

そう言いバーサーカーは現場へと向かった。

「これからあれにどう対処する？」

キャスターが召喚した海魔が陸に上がらぬように戦っていたランサーとライダー、セイバー。

だが、いくらやってもきりが無いためいったん岸に戻って作戦会議をしていた。そこへ一つの声が聞こえて来た。

『どうやら困っているようね』

その声と共にバーサーカーが皆の前に姿を現した。

「バーサーカー！」

「お前も来ていたのか」

「ええ、たつた今着いた所よ。それで、あれを倒せばいいのよね？」

そう言いバーサーカーは巨大な海魔を指した。

「ああその通りだ」

「だったら下がってなさい。私が如何にかしてあげるわ」

そう言いバーサーカーは手のひらを海魔に向けた。

「ツキユー！」

そして掛け声と共に手のひらを閉じた。

すると海魔の一部が爆発した。

「あら？意外と頑丈みたいね。だったら・・・これならどう!!」

そう言いバーサーカーは向日葵の付いた日傘を手を持つとその先を海魔に向けた。

するとその先端から極太レーザーが発射された。

「無駄ア無駄無駄無駄アア!!」

バーサーカーはそれを連続で発射し始めた。

そのレーザーは一撃一撃が海魔を貫通した。

「WRYYYYYYYYY!! 最高にハイ! つてやるよおおオオオオオ!!」

「おい、バーサーカーの奴、ちよつとヤバくないか?」

「確かに、狂つてきている様な気がするのう(汗)・・・」

『バ、バカなあアアああ!!?』

キヤスターをそのレーザーの一つが呑み込んでいった。

キヤスター、ジル・ド・レエ。バーサーカーのレーザーに呑まれて・・・
死亡!!
リタイア

「私の力は世界一いいイイイイイ!!」

そして勝利の声を上げるバーサーカー。場が混沌化している。

「けどまだ戦い足りないのよね〜」

そう言いながらバーサーカーは後ろを振り向いた。

「私の相手してくれないかしら? 征服王イスカンドル・・・」

「・・・こりゃあ、本気で行かないと不味いのう・・・」

「おい、まさかお前。彼奴と戦うつもりじゃあないだろうな!」

ライダーのマスターは自身のサーバントの言動に声を上げた。

「そりゃあ勿論相手するに決まっておろう」

「バカア！彼奴と真面に戦って勝てると思ってるのかよ!？」

「まあ、我一人では勝てないで在ろうな」

「お前、それはどういう意味だよ・・・」

するとライダーの周りから砂を含んだ風が吹き始めた。

「我とて、お前と戦うとなれば手加減は出来んぞ、バーサーカーよ・・・」

「・・・それでいいわ。本気で来てくれなきやつまらないじゃないの!」

そう言っている間に皆の視界が一瞬奪われた。

そして、視界が戻った時には周りには砂漠が広がっていた。

「・・・固有、結界。・・・そんな馬鹿な!?!心象風景の具現化だなんて・・・」

「確かに我一人では出来ないであろうな。だが、此処はかつて我が軍が駆け抜け、戦った場所だ!」

するとライダーの後ろの方から地響きが聞こえて来た。

「見よ、我が無双の軍勢を！肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち。彼らとの絆こそ我が至宝！我が王道！イスカンダルたる余が誇る最強宝具、

『王の軍勢』なり!!」

『ウオオオオオおおおオオオオ!!!』

その場所から多くの人間が現れライダーの言葉に雄叫びを上げた。
その光景を見てバーサーカーは顔に笑みを浮かべた。

第10話 炎の化身

「王とは——誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉！すべての勇者の羨望を束ね、その道標として立つ者こそが、王！故に、王は孤高にあらず。その偉志は、すべての臣民の志の総算たるが故に！！」

『『然り！然り！然り！』』

英霊たちの斉唱が大地を揺るがし、大音声の波が圧力を持って鼓膜を叩く。騎兵が、歩兵が、一斉に盾を太鼓のように打ち鳴らして歓呼する。蒼天の彼方まで突き抜けていく金属の大合唱が地の果てまで響き渡る。

「さて、では始めるかバーサーカーよ見ての通り、我らが具現化した戦場は平野。生憎だが、数で勝るこちらに地の利はあるぞ？」

「素晴らしいわイスカンドル。この人数のサーバントを束ねる事が出来るカリスマ性が有つてからこそ出来るのである。こちらにも楽しむ事が出来そうね・・・」

そう言いバーサーカーは傘をしまった。

そして、バーサーカーの姿が変わった。

銀色の髪をポブカットにし、黒いリボンを付けている少女の姿へと変わった。

その横には白い零みtainのが浮かんでいる。

その姿で一振りの刀を構えた。

「ほう、姿を変えたか。だが、我らが具現化したのは平野。数で勝るこちらに地の利があるぞ……」

「それ位分かつている……」

「そうか……。それじゃあ、行くぞー！」

そう言う自身短剣を掲げ、ライダーは告げた。

「蹂躪せよ!!」

『『『ウオオオオおおおおオオオオオオ!!』』』』

そのライダーの言葉と共に英雄達もバーサーカーに向かって駆けはじめた。

だが、ライダー達から霧の様なものが出始めていた。

しかし、ライダー達は自身達が起こした砂煙によって気づく事が出来なかった。

その霧の色は紅蓮の炎の様な色をしていて、バーサーカーの下へと集まって行く。

そこで漸くライダーはその霧の存在に気付いた。

「気御付けろ!!」

その間に霧はバーサーカーの持つ剣へと吸収されていく。

そして、全てが吸収された瞬間にバーサーカーは叫んだ。

「もっと、熱くなれよオオオおおおオオオ!!」

その叫びとともにバーサーカーの色が霧と同じ色へと変わり、髪も炎の様に逆立った。

そして、紅く染まった剣をライダー達に向かって振るった。

「熱くなれよオオオおおおオオオ!!」

すると剣から巨大な炎が放たれた。

「何だ?!?お前達、 躲せ!!」

『グアアアああアア?!?』

ライダーは声を掛けたが、四分の一が炎に吞まれてしまった。

そして躲す行動によってバーサーカーに向かって駆けていたが止まってしまった。

「.....ふう、スツとしたわ」

その言葉と共にバーサーカーが元の姿に戻った。

対してライダーは顔には出していないが焦っていた。

自身の軍の四分の一を一撃で消し去られてしまったからである。

「おい、どうだバーサーカーよ。満足したか?」

「ええ、満足よ。楽しかったわ」

「それじゃあ、今宵はこれで終わりにせんかのう?」

「別に構わないわよ」

バーサーカーの言葉にライダーは結界を解いた。川辺に戻た。

「それじゃあ、今回はありがとうねライダー。楽しかったわ」

そう言いバーサーカーは姿を消した。

「坊主よ、我らも帰るぞ」

「分、分かった・・・」

そうしてマスターを連れてライダーはその場を去った。

「俺もこれで失礼する」

ランサーもこの場を去った。

「バーサーカーめ、本当に何者なのだ・・・」

その場にはセイバー眩きを通り抜けた・・・。

リメイク

第零話 プロローグ

「……此処は何処かしら？」

周りに何も無い白い空間に一人の少女が立っていた。

「確か私は飲酒運転のトラックに轢かれて死んだはず……、ならば此処は輪廻の輪を潜る前の所なのかしら？」

『当たらずとも遠からずと言った所だな』

その声が聞こえたので少女は後ろに振り返った。

そこには『遊〇王』のロキの姿があった。

「貴方は……神か？ 私は『楓馬優奈』ふうまゆうなと言います」

『そうか、確かに私は神のロキだ。そして此処は転生の間だ』

「転生の間……と言う事はこれは所謂テンプレと言う奴ですかね？」

『そうそう、その通りだよ。まあ、此方のミスで死んでしまった訳ではないがな』

「と言うと……」

『まあ、神の気まぐれでお前を転生させる事になってな。その為に私が此処で転生させ

る為に來たと言う訳さ』

そう言うとき口はため息を吐いた。

「その神の気まぐれっていったい……」

『ああ、それは本当に気紛れなんだよ。死んだ奴から偶に此処に連れ込んで転生させるんだよ』

「そうなのですか……」

『さあ、そろそろ説明をして行くぞ』

「ええ、分かったわ」

『先ずは転生する世界は……「Fate／Zero」の世界だな』

「あの命を懸けて戦うと噂の……ですか？」

『どうやら原作を知らないようだ。その通りだ。序でに言うときバーサーカーとして行ってもらうぞ』

「そ、そうですね……。生き残れるかな？」

『まあ、確かに生き残れる可能性は少ないが聖杯に触れてくれれば、こちらから受肉させる事が出来るからがんばってくれ』

「わ、分かりました」

『それじゃあ、次は転生特典は取り敢えず言ってみろ』

「・・・え?」

『この転生の特典は数じやなく用量で決まっているからな。まあ、とにかく言ってみろ』
そう言われて考え込む楓馬優奈。

暫くして考えが纏まったみたいで・・・

「まずは狂化のステータスを無効に出来る様にしてください」

『それ位はまだまだ大丈夫だな』

「次に『東方Project』のキャラの能力をください」

『・・・全てでいいのか?』

「ううん、「運命を操る程度の能力」「火水木金土日月を操る程度の能力」「気を使う程度の能力」「時を操る程度の能力」「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」「境界を操る程度の能力」「死を操る程度の能力」「蟲を操る程度の能力」「狂気を操る程度の能力」「あらゆる薬を作る程度の能力」「老いる事も死ぬ事も無い程度の能力」「心を読む程度の能力」「無意識を操る程度の能力」「正体を判らなくする程度の能力」の十四個でお願いします」

『これでほとんど使い切ったぞ』

「じゃあ「東方Project」のキャラである「レミリア・スカーレット」の姿になれるようにしてください。お願いします」

『・・・うん、それなら大丈夫だな。流石にもう無理だがな。後、「ありとあらゆるものを破壊する程度の能力」はなくなる事なる』

「どうしてですか？」

『辻褄を合わせる為の設定でお前に妹としてフランドールがいる事にするからだ。後、おまけで日光を弱点じゃ無くしておくよ』

「分かりました。そしてありがとうございます！」

『それじゃあ準備をするから少し待っていてくれ』

そうするとロキが色々と作業をし始めた。

暫くすると・・・

『よし、準備出来たぞ！』

するとロキの後ろに光の門が現れた。

『この門を通れば転生する事ができるぞ』

「分かりました」

そう言うのと楓馬優奈は門を潜って行った。

『行ったか。さて、それじゃあ私も彼奴らに報告しに行くかな』

そう言いロキは門を消して去って行った。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返すつどに五度。ただ、満たされる刻を破却する」

「——告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者

——

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」

魔法陣が光輝く。無数の蟲が蠢く間桐邸の地下室『蟲蔵』で、間桐雁夜が『バーサーカー』を召喚した。

「問いましよ。私を呼び、私を求めバーサーカーの座を依り代に現界せしめた召喚者、貴方の名前をここで問う。貴方は何者だ？」

「バーサーカー……なのか？」

地べたに這いつくばりながら、己の召喚したサーヴァントを見上げる間桐雁夜。

「カッカッカ……随分と脆弱なバーサーカーを召喚したの、雁Y」

気味悪い笑みを浮かべた老人、間桐臓硯がセリフを言い終わる前に塵となって消えた。

「な、どう言う事だ。それに蟲達も消えている」

そう雁夜の言う通り蟲蔵の蟲が全て消えていた。

そして自身のサーヴアントであるバーサーカーの方に目を向けるとそこには間桐桜を膝枕しているバーサーカーが居た。

「さ、桜ちゃん!!」

「この子は大丈夫よマスター」

慌てる雁夜にバーサーカーが言った。

「そ、そうか……よかった。……いや!臓硯が!」

「ああ、あの気味の悪い爺さんなら殺してしまったわ」

「……へ?」

「ついでにこの子の中に入っていたのも消しといたから」

「そ、そうか」

安心した雁夜に対してバーサーカーは……

「それで、貴方は何者かしら?」

「あ、ああ、俺の名前は間桐雁夜、君のマスターだ」

「そう、私はレミリア。バーサーカーですわ」

こうしてバーサーカー陣営が結成された。

バーサーカーのステータス

クラス：バーサーカー

真名：レミリア・スカーレット『旧名：楓馬優奈（ふうまゆうな）』

性別：女

属性：幻想

ステータス：筋力B、耐久A、敏捷A、魔力A＋、幸運A、魔力耐性A

特技：料理、掃除、手芸等の家事全般

好きな物：スイーツ、子ども

苦手な物：魚介類

【宝具】

名前：銀ナイフ

対人宝具

ランク：D

説明：綺麗に磨かれた銀で出来たナイフ。何本にも分かれる事が出来る。

名前：第三の眼

対人宝具

ランク：C+

説明：「心を読む程度の能力」を使用する時に出現する。詳しくは「心を読む程度の能力」の説明する。

名前：カリスマ

対人宝具

ランク：A+

説明：意識せずとも見た物を虜にしてしまうほどのカリスマを放つ。魔術の心得や魔力耐性がある者、自身が目指すものがはつきりと決まっているものに対してはあまり効果を発揮しないが少し飲まれてしまう。

名前：カリスマブレイク

対人宝具

ランク：A+

説明：自身が放っているカリスマを失う様な行動をすることで発動し、その際のカリスマが崩壊する衝撃波で攻撃する。威力はその時々で変わる。

名前：カリスマガード

対人宝具

ランク：A+

説明：自身が放っているカリスマを自身の周りに集め楯とする。固さはその時々で変わる。

名前：???

??宝具

ランク：??

説明：? ? ? ? ?

【保有スキル】

名前：主婦スキル

ランク：A

説明：転生する前に一人暮らしをして綺麗好きな性格も相まって掃除のスキルが上
がった。仕事は保育園で働くつもりだったので子供の対応や手芸、料理の腕も上がった
為スキルとして昇華された。

名前：単独行動スキル

ランク：EX

説明：マスターからの魔力供給が無くても自由に移動する事ができる。

名前：運命を操る程度の能力

ランク：A

説明：運命を誘導し、思い描いている運命へと促す事ができる。ただし、確定して起
こせる訳ではないので失敗する事がある。

名前：火水木金土日月を操る程度の能力

ランク：A

説明：五行に日と月の2属性を加えた属性魔法を使いこなす事ができる。

名前：時を操る程度の能力

ランク：A+

説明：時間を止める、あるいはその流れの早さを操作する事ができる。但し、時間を戻す事はできない。応用として空間を弄る事も可能である。

名前：気を使う程度の能力

ランク：B

説明：武術で置ける気を扱う事ができる。

名前：境界を操る程度の能力

ランク：E X

説明：生と死以外のあらゆる境界を操る事ができる。これを用いて色々な場所に移動する事や攻撃を相手に帰す事も出来る。

名前：死を操る程度の能力

ランク：E X

説明：生きているものを一切の抵抗を許さずに絶命させる力を操る事ができる。但し不老不死者には意味をなさない。

名前：蟲を操る程度の能力

ランク：C

説明：この世に存在するあらゆる蟲を従えることができる。蟲との会話も可能にしている。

名前：狂気を操る程度の能力

ランク：B

説明：使用時に眼が赤くなり、それを直視したものを狂わせ幻覚を見せる事ができる。応用として存在を薄くしたり、遠くの声を聞く事が可能である。

名前：あらゆる薬を作る程度の能力

ランク：A

説明：文字通り様々な薬を作る事が出来る。但し製造法が物理的に不可能なものや、そもそも材料が無い薬は流石に作れない。

名前：老いる事も死ぬ事も無い程度の能力

ランク：E X

説明：文字通り、どんな怪我を負っても死ぬ事はないし、病気になる事すらない。首の骨が折れようが腕が千切れような大怪我だろうが一瞬で元に戻ってしまふ。それこそ髪の毛一本から全身の再生までも可能である。

名前：心を読む程度の能力

ランク：A +

説明：「第三の眼」を使用し相手の心を読むことができる。相手の心にトラウマとして残されている事を再現したり、見せたりすることができる。

名前：無意識を操る程度の能力

ランク：A +

説明：他の者に存在を感知されなくなったり、自身の行動を読まれにくくなる。

名前：正体を判らなくする程度の能力

ランク：A

説明：物体・生物から姿形・音・匂い等を奪い、行動だけを残すことで正体を分からなくする事ができる。

第壱話 始まりの狼煙

召喚されて早々、私はマスターの身体を直す薬を作っているわ。

まさかマスターの身体が此処まで壊れかけているとは思わなかったわ。

「さて、この薬を毎日一錠飲みなさい。これを飲んでいけば貴方の体は元に戻るわ」

はあ、まさか好きなキャラである永琳の「あらゆる薬を作る程度の能力」を貰つてよかったわ。

「そ、そうか、分かった」

「さて、マスター。これからはどの様に動くつもりかしら？」

これを聞いて置かないといけない。

「そ、その前にお前のステータスは………な、なんだこれは!?!出鱈目過ぎるじゃないか!?!」

まあ、確かに出鱈目な力を持っているからこのリアクションが妥当なのかしら？

「こ、これなら遠坂に勝てる!!ツガア!!」

「落ち着きなさい!まだ貴方の体は壊れかけているのだから!!」

「す、すまない……」

まったく、これじゃあ先が思いやられるわ。

それよりも、私の中に聖杯戦争の知識が存在しているのは何故かしら？

サーヴァントとして召喚されたから得たのかは置いておくとして・・・少し、いやおかし過ぎる。

私がレミリア・スカーレットとして召喚されている時点で聖杯がおかしくなっている可能性があるわね。

まあ、マスターには黙って置くとしますか。

変な疑惑を持たれて自害させられたくないからね。

「そろよりも・・・はい、これ」

「これは何だい？」

「桜ちゃん用の薬よ。まあ私でも心は直す事は出来ないけど、体だけでも健康な状態にして置かないといけないからね」

「そうか・・・」

「それも一日一錠よ。しっかりと飲ませて置いてください」

「分かった。色々とすまないなバーサーカー」

「貴方は私のマスターなのだから当然です。・・・それじゃあ私は霊体化してるから何かあったら呼びなさい」

「ああ、了解」

その言葉を聞いて私は霊体化した。

そして、屋敷の屋根の上に霊体化を解いた。

「行きなさい。我が僕達よーこの町を監視し、異常な事が起きたら私に報告しなさい!!」
その言葉と共に多くの蟲や蝙蝠達が町中へと飛んで行つた。

「ふふ、これで情報戦では負ける事はまずないわね。だけど、油断はしない。だが、私はまだ動く時ではないな」

その言葉を残してバーサーカーは再度霊体化して消えていった。

とある屋敷の一室・・・

そこでは一人の男が魔術器具で会話をしていた。

『師よ。どうやらマスターの柩は昨夜全て埋まったようです・・・』

「そうか、では今夜、例の作戦を開始する。準備しておいてくれたまえ・・・」

『了解しました師よ・・・』

そう言い会話を終わらせた。

「ふふ、勝利はわが手の中にある……」

そう言いワインを呷った。

その様子を一匹の蟲に見られている事を知らずに……

第貳話 夜に集いしサーヴァント

「マスター……」

屋敷で桜が寝たのを確認して部屋を出た後、バーサーカーが出現した。

「どうした?」

「先ほど遠坂邸にてアサシンのサーヴァントが遠坂のサーヴァントと思われる者に殺されるのを我が僕が確認した」

「そうか……始まったんだな」

「ええ、明日から他陣営も動き出す筈よ」

「その時は頼むよバーサーカー……」

「任せて置きなさい、私に敗北の二文字は無いわ」

そう言い霊体化するのかと思っていたバーサーカーが雁夜の方に向き直った。

「そう言えば、今回の事は意図的に起こされた可能性があるわ」

「なんだと!」

「昨夜遠坂邸で遠坂時臣を師と呼ぶ者と会話しているのを目撃したとの報告もあったし……」

「……この事はどう思うバーサーカー」

「協力者であったのであればこの行動はおかしい、敵対関係で在ったとしてもアサシンのサーバントの存在に侵入しようとしている時点で気が付いて迎撃しているのもおかしいわ」

「確かにそうだな……」

「この事から考えるに……他陣営の油断を誘おうとしているのかもしれないわね」
バーサーカーの言葉を聞き雁夜は考えた。

「……バーサーカー、遠坂邸と教会を少し嚴重に監視してくれ。後、屋敷周りの警戒をしておいてくれ」

「了解したわマスター……」

そう言いバーサーカーは霊体化していった。

☆・☆・☆・☆・☆・☆・☆・☆

次の日の夜・・・

二十時の間桐邸でバーサーカーが何かを感じ取った。

「マスター・・・」

「どうしたバーサーカー」

「倉庫街で強い魔力を放っている者がいるわ。おそらくサーヴァントよ」

「・・・向かってくれるかバーサーカー」

「了解したわマスター。大丈夫だと思うけど危なくなったら令呪で私を呼んで頂戴ね」

「分かった」

その返事を聞いたバーサーカーは霊体化してその場を去った。

☆・☆・☆・☆・☆・☆・☆・☆・☆・☆

「我が名は征服王イスカandal！此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した!!」

周囲は、彼のマスターも含めて哑然となった。

「何を考えてやがりますか、この馬つ鹿はああああー!？」

イスカンダルのマスターの魂の叫びが響き渡った。

パチパチパチパチ

その時何処からともなく拍手が聞こえてきた。

『ふふふ、中々面白かったわよ諸君・・・』

「貴様、隠れてないで出て来い!!」

『あら？私はずっと貴方の近くのコンテナの上に居たわよ』

その言葉を聞いてその場の皆がコンテナの上を見ると一人の少女が立っていた。

しかし、少女から放たれている何かでその少女が只者ではない事が周りの者は分かった。

「ほふあく・・・」

「これ、確りせんか坊主!」

「はッ!た、助かったよライダー・・・」

どうやらライダーのマスターは吞まれかけたらしい。

「貴様・・・何者だ」

「そう聞かれて答える者がいると思う?」

「くッ、」

「まあ答えるとしたらバーサーカーよ、と答えるわ」

それはこの場にいる者達は驚愕した。

狂戦士である者が言葉を発しているのだから。

だが、この者はそれ以上答えるつもりは無いらしい。

「それよりもお前さん」

「どうかしたかしらライダー？」

「お前さんが放っているものをやめてくれんかのう。我がマスターが吞まれかけてしまっているからのう」

「それは無理ね。これは自動的に発動してしまう私の宝具なのだから」

そう言うとその者の方に一匹の蝶が止まった。

「おや、どうかしたの？・・・・・・ふうん、分かったわ。もう行っていいわよ」
その言葉を聞いて蝶は闇夜に隠れるようにして消えていった。

第参話 黄金の英霊

「お前さん……一体何をしておったのだ？」

先程の行動に対してライダーが問うた。

「ふふふ、秘密よ。少しは自分で考えなさい」

「ううくむ」

彼女の言葉にライダーは真面目に考え始めてしまった。

その時イスカンダルのマスターが声を上げた。

「な、なんだこれ!？」

「む?どうした坊主」

「こいつのステータスが見えないんだよ!？」

そう言われて彼女はこう答えた。

「それも秘密よ」

「まあ、そりやそうだろうな」

ライダーとして何でも答えてもらえるとは思っていなかった。

「さて、そろそろもう一人にも出てきて貰おうかしら?」

「む、どういふことだ？」

「貴方達の戦いを見ていたのが私とライダーだけではないという事よ」

そう言うのと彼女は近くの街灯を見て言った。

「そろそろ出て来たらどう。それとも怖いのかしら？」

その言葉の少し後に黄金のオーラと共に一人の男が現れた。

「ほう、この我に向かつて大きく出たな女」

アサシンを殺したサーヴァントの威圧を受けている筈なのに彼女は涼しい顔をしている。

「ふん、答えぬか。なら散り様で我を享受させよ」

その言葉と共に背後に黄金の波紋が二つ現れその中心に剣と槍が出てきた。

それこそアサシンを殺つたものである。

そしてバーサーカーに向かつて放たれた。

パチンツ！

バーサーカーが指を鳴らすと放たれていた剣と槍がアーチャーの街灯に向かつていた。

アーチャーは街灯から飛んで回避して地面に着地した。

その顔は怒りに染まっていた。

「……天に居るべき我をお前らと同じ地面に立たせるか！もう塵一つ残さぬぞ！！」

先程とは違い波紋が三十ほど生まれそれにそれぞれ違う武器が存在していた。

それを見た周りで傍観していた者達も驚いた。

「バ、バカな!？」

「何なんだ彼奴は!？」

だがバーサーカーは落ち着いていた。

それどころか喜びの笑みを浮かべていた。

いつの間にか付けていた一つの目玉を浮かべて……

「ふふふ、これなら楽しめそうね」

「……ふん」

その言葉と共に武器がバーサーカーに向かって放たれた。

「ハハハ！本能「イドの解放」!!」

それに対してバーサーカーはハートの形をした弾幕をばら撒いて武器を相殺したり逸らしたりして耐えきった。

アーチャーが次の攻撃をしようとした時、急に動作が止まり更なる怒りが顔に浮かんだ。

「臣下の分際で我にこの場を引けと、大きく出たな時臣!!……命拾いしたな女。だが次

は必ず我が手で断罪してやるから待つておれよ!!!」

そう言いアーチャーは霊体化して消えていって行った。

第肆話 キャスター陣営の末路

「ほう、アーチャーのマスターは冷静であつたようだのう」

ライダーがその様な事を言っていると・・・

ガキンツ

するとバーサーカーが魔力でできた槍でランサーを攻撃した。

何とかランサーは自身の槍でその攻撃を防いだ。

「ランサー・・・私も槍を使うのよ。だからどちらが真の槍使いか勝負をしましょうか!!」

「・・・いいだろう。その勝負受けて立つ!!」

ガキンツ

ガキンツ

ガキンツ

ガキンツ

ガキンツ

ガキンツ

ガキンツ

数回槍を交えた後お互いに距離をとった。

「やるなバーサーカー」

ランサーはそう言ったが自身の接触している物の魔力を打ち消す長槍『破魔の紅薔薇』が効かない事に心の中で驚いていた。

「そつちこそ中々の技術ね」

そう言いながら自身の槍を肩に担いだ。

その時一匹の蝙蝠がバーサーカーの周りを飛び回り始めた。

「どうした、そんなに慌てて．．．．．何だど!?それは真か!!」

そう言うどバーサーカーは自身の槍を消して言った。

「ランサー、この勝負預ける!」

そうしてバーサーカーは霊体化してその場を去った。

☆・☆・☆・．．．．．

「聞こえるかマスター!」

『どうしたバーサーカー、そんなに慌てて・・・』

「キャスターと思われるサーヴァントが自身のマスターと思われる人物と共に小さな子供を攫っているのを私の僕が目撃した！」

『なんだと!? 本当なのかバーサーカー!!!』

「本当よ! 今も私の僕が追跡しているわ!」

『・・・バーサーカー、子ども達を助けてくれ!!』

「元からそのつもりよ!」

その様な会話を念話でしながら町の中を駆けていった。

☆・☆・☆・☆・☆・☆

「結構集まりましたね龍之介」

「うん！さー青髭の旦那！！最高にc o o ーな事を行おうぜ！！」

排水溝の中にキャスター陣営は居た。

先ずはキャスターのマスターである雨生 龍之介。

「死」を知るために殺人を行っている。

そしてキャスターのサーヴァントとして召喚された青髭。

真名は英仏百年戦争のフランス軍の元帥、ジル・ド・レエである。

「それじゃあ早速・・・」

そう言いながら龍之介は催眠状態の子どもに手を伸ばした。

ドサツ　　ブシューウウツウウウウウウウウ！！

しかし、手が届く前に腕ごと切り落とされてしまった。

「うああああああああああああああああああ！！」

「りゅ、龍之介!?!大丈夫ですか!?!」

グサツ

キャスターが心配そうに龍之介に近寄ろうとしたらいつの間にか脳と心臓に銀色の

ナイフが刺さっており、そして倒れて動かなくなった。

そして龍之介は自身からあふれ出ている血を見て喜んでいた。

「何だよ、こんなに近くに答えがあったなんて・・・」

そう言い終わると同時にキャスターと同じ様にナイフが刺さって死亡した。それと同時に催眠状態だった子供たちが気絶して倒れた。

それを確認したかのようにバーサーカーが姿を現した。

「これで始末する者は終わったわね。後は・・・」

バーサーカーはそう言いながら自身の能力でスキマを開いた。

そこはどうやら交番へと繋がっているらしい。

そしてバーサーカーはそのスキマへと子どもを入れていった。

「これで後は警察が何とかしてくれるでしょう」

そう言いながらバーサーカーはその場を去った。

第伍話 間桐家の日常

キャスター陣営を殺った翌日……

「そうか、キャスター陣営を殺ったか」

「ええ、子どもは交番の前送って置いたから大丈夫でしょう。それよりマスター」

「どうしたバーサーカー？」

「どうやらアサシンはまだ存在しているみたいよ」

そのバーサーカーの報告に雁夜は驚いた。

「何?! アサシンは時臣のサーヴァントに殺られたんじゃないのか?!」

「ええ、その通りよ。だけど今回の戦闘時クレーンの上にアサシンが観察をしているのを私の僕の蝶が確認したわ。多分だけど、アサシンの宝具によって自身の分身を作ったのかもしれないわね……」

「そうか……」

「多分昨夜のはアサシンが脱落したと見せかけて、その油断の際に情報を収集しようとしているのかもしれないわね……」

そう言い一旦区切るとバーサーカーは続けた。

「一応あの場にいた者達と遠くからその場を観察していた者には蟲を複数つけて置いたから各陣營の拠点が分かるのも時間の問題だと思うわ」

そう雁夜に報告するとバーサーカーに一匹の蜘蛛が上から降りてきて肩に停まった。

「あら、何かあつたのかしら？・・・そう、分かったわ。引き続きお願いね」

バーサーカーの言葉を聞いて蜘蛛は天井へと登ってその場を去った。

「何かあつたのかバーサーカー？」

「ええ、どうやら遠坂陣營と教会はグルになっているみたいよ」

「・・・何、それは本当か？」

「本当の事よ。まあ、アサシンのマスターを保護している時点で教会とグルだと考えていたけど、今の報告で本当だと分かったわ」

「・・・アサシンの人数は分かるかバーサーカー？」

「分からないわ。だけど最低でも六人いるわ。各陣營に一人ずつとそれを報告するのに一人つといたところかしらね」

「おい、付けられていないよな？」

「大丈夫よ。私の能力で幻覚を見てもらっているからね」

「そうか、それならいいのだが・・・」

コンッコンッ

その時部屋をノックされた。

そして扉を開けて桜が入って来た。

「どうしたんだい桜ちゃん？」

「・・・お腹すいた」

そう言われて時計を見ると十二時になろうとしていた。

「もうこんな時間だったのか・・・」

「だったら私が準備してくるわね」

「すまないバーサーカー」

そうしてキツチンに向かおうとしているバーサーカーだが、袖を引かれた。

そこには桜がこちらを見ていた。

「どうかしたのかしら？」

「・・・私も手伝う」

どうやら桜も料理を手伝いたいらしい。

いいのかつと目で雁夜に尋ねると頷かれた。

「はあ、着いてきなさい。教えてあげるから」

「・・・ありがとう」

そうして二人は会話をしながら部屋を出ていった。

その様子を雁夜は微笑ましそうに見ていた。

第陸話 戦闘に向けて・・・

「マスター、他陣営の拠点の位置が分かったわ」

「そうか、教えてくれバーサーカー・・・」

「先ずはライダー陣営の拠点だけ・・・市民の老夫婦に催眠を掛けて息子と思わせてそこを拠点として利用しているみたいね・・・」

その報告を聞いて雁夜は一瞬顔を顰める。

「・・・奴隷の様な事はしていないんだな？」

「ええ、むしろ老夫婦には喜ばれているみたいよ。元々息子ができなかつたようだし・・・」

「・・・そうか、続けてくれ」

「次にランサー陣営だけ・・・市内の高級ホテルの部屋を拠点としていたみたいなんだけど、昨晩謎の爆発によって倒壊したみたいで市内から近い所に存在する廃墟を拠点にしている様よ」

「待てバーサーカー、その爆発ってやつぱり・・・」

「ええ、他陣営による爆破とみて間違いないわ。その中の様子を見ていた私の僕はその

倒壊に巻き込まれてしまったからわからないけど・・・、たぶんセイバーのマスターが行ったと思うわ」

その報告に雁夜は驚いたが同時に納得した。

バーサーカーが多くの英霊が集まったあの場を見ていた者達には蟲を付けて置いたといっていたことの意味を・・・

「・・・その場の近くにセイバーのマスターでも居たのか？」

「ええ、そしてあの夜には銃のスコープを覗きながらその場にいた相方と通信機で話しをしていたみたいよ。ちなみにその相方は爆破されたホテルの近くの工事中の建物で見張っているのを目撃されているわ」

「そうか、それじゃあセイバー陣営は何処を拠点にしているんだ？」

「セイバー陣営は森の奥にあるアインツベルンの城を拠点にしているわ。ちなみにその城には多くの即死級の罠が仕掛けられているみたいよ」

「そうか・・・」

「アーチャー陣営とアサシン陣営は知つての通り遠坂邸と教会を拠点としているわ。アサシンが見てきた情報も私に流れて来るから助かるっちゃ助かるのだけれどね」

その報告を聞いて雁夜は決断した。

「・・・バーサーカー、今夜アインツベルン城に向かってくれ」

「セイバー陣営の拠点を壊せばいいのね？」

「そうだ、できるかバーサーカー？」

「できるとも。言ったであろう、”私に敗北の二文字は無いわ”と・・・」

「そうだったな。それじゃあ頼むよバーサーカー」

「任せて置きなさい」

そう言いバーサーカーは霊体化した。

☆・☆・☆・・・・・・・・

間桐家の旧蟲蔵・・・

「フフフ、この屋敷には良い材料が揃っているわね。御蔭で色々なものが作れるわ！」
バーサーカーが今宵の戦いに備えて何かを作っているのだった・・・

第漆話 拠点攻め

夜のアインツベルン城・・・

その一室にセイバー陣営は集まっていた。

「アイリ、周りの状況はどうなっている？」

「大丈夫よ切嗣、使い魔や人も来ていないわ」

その返事を聞き切嗣は考えた。

使い魔などが来ていないのに何者かに情報が漏れている・・・そう感じていた。

アサシンが生きている事は知ってはいるが・・・本当にアサシンによるものなのか。

何者かが違う方を使っているのでは・・・

切嗣がそこまで考えているとアイリスフィールが叫んだ。

「切嗣！ランサーとそのマスターが来たわ!!」

「そうか・・・アイリ、判断は任せる」

「分かったわ。セイバー、行って！」

「了解しました」

その言葉と共にセイバーはランサーの下へと駆けていった。

☆・☆・☆・☆・☆

「ふうん、どうやらランサー陣営も動いている様ね。拠点が破壊された事に対してのやり返しかしら？」

その頃バーサーカーはアインツベルン城の上空を飛んでいた。

そこからランサー陣営が城に向かっていているのを確認した。

「まあ、槍使いとしての勝負を着けたかったけど………今宵は諦めますか」

そう言いバーサーカーは一つのピンを取り出した。

その中には見ただけでヤバいと分かる色をしている液体が入っていた。

「さあ、少し派手に行きますか……」

そう言いランサー陣営に向かってピンを落としたのだった………

☆・☆・☆

「ランサー、もうすぐ目的地に到着する。警戒を怠るな」

「了解しました主……っ!?主!上から何か来ています!!」

「何!? 月 霊 髓 液!!」

その掛け声と共に水銀がケイネスの体を包み込んだ。

それと同時にビンが地面へとぶつかり周りに紫色の霧が立ち込めた。

「これは……毒か!?ランサー!私を連れてここから離れる!!」

「分かりました主!」

そう言われランサーはケイネスを抱えて自身の速さを生かして霧から離れた。

「ふふふ、此処までうまく行くとわね……唯の煙幕だったのに。先入観つてすごいわね……」

それをバーサーカーに見られていると知らずに……

「それじゃあ、向かうとしますかね」

そしてランサー陣営を見送るとバーサーカーはアインツベルン城に向かい始めた。

☆・☆・☆・☆・☆

「まさかバーサーカーが現れるとは思わなかった」

「そうね、だけどこのままいけばセイバーと会う事になるわ。彼女に任せましょう」

「・・・そうだなアイリ」

切嗣は渋々頷いた。

それを見てアイリスフィールは苦笑いをこぼした。

第捌話 剣士と悪魔

「貴様はバーサーカー!!」

「あら、久しぶりじゃないセイバー」

アインツベルンの森の中。

城に向かっていたバーサーカーとランサーの下に向かっていたセイバーが出会った。

「バーサーカー、ランサーを知らないか?」

「ああ、ランサー陣営なら私が追い返して置いたわよ。今回は貴方の陣営と戦いに来たんだから・・・」

「そうか、なら相手してやる!」

そう言いセイバーは見えない剣を構えた。

それを見てバーサーカーは炎の剣を構えた。

「それじゃあ行くわよ」

そう言い炎の剣をセイバーに向けて振るった。

そこから炎の弾幕が放たれた。

「何ッ!?!」

セイバーは驚いたが木に隠れる事で躲したが隠れた木が焼け倒れた。

「まだまだ行くわよ！獄符「千本の針の山」!!」

バーサーカーがそう宣言すると地面から魔力でできた赤い巨大な針がランダムで出てきた。

「さあ、動き続けないと刺さるわよ！ついでにこれも行くわよ！蝙蝠「デビルズ・パーティ」!!」

その掛け声と共にバーサーカーから蝙蝠型の弾幕が放たれた。

地面から出て来る針を避けながら蝙蝠型の弾幕を躲そうとするが躲してもセイバーを追尾していく。

「くッ、追尾型か!?!」

そう言いながら蝙蝠型の弾幕を剣で薙ぎ払って行く。

その隙にバーサーカーは複数のピンを空中に放った。

するとピンはそこに付いていた加速型の魔法が発動して城へと向かって行った。そして城にぶつかると爆発して壊していった。

「なっ!?!貴様!!」

「ふふふ、私の攻撃に対応できなかつた貴方が悪いのよ?」

「黙れ!此処でお前を斬り伏せてやる!!」

セイバーの言葉にバーサーカーは顔に笑みを浮かべたが、肩に一匹の蛾が止まった。「どうしたんだ・・・なんだと」

笑みを浮かべ続けていたが蛾の話の話を聞くと、すぐに真面目な表情になった。

「何がだ!」

「どうやら貴方のマスター達がアサシン陣営との戦いでピンチみたいだけど?」

「何・・・ツ!? アイリスフィール!!」

「行きたければ行けば? 私の今回の目的は貴方の陣営の拠点の破壊なんだからね」

「・・・ちっ!」

セイバーは舌打ちをすると森の中を走って行った。

それを見送ったバーサーカーは城へと向き直った。

「さて、私もやる事を終わらせませるかね・・・」

そう言い先ほどのピンを数百個スキマから放り城を爆破していった。

そして遂には城は崩壊してしまった。

「ふう、これで終わったわね。さて、お前達」

そうバーサーカー言うのと闇から蝶、蛾、蠅、蜂などの蟲が現れた。

「命令よ、セイバー陣営を追跡して新たな拠点の場所を報告しろ。成果を楽しみにしているぞ・・・」

バーサーカーがそう言い終えると集まった蟲達は任務へと向かって行った。「それじゃあ、私も帰るとしますかね．．．」

そう言いバーサーカーは霊体化しその場を去った。

第玖話 女への仕込み

間桐邸……

その廊下を歩いてきた雁夜は向かいから誰かが歩いているのを感じた。

「もう戻って来たのかバーサーカー？」

「ええ、セイバー陣営の現代兵器と罫だらけの拠点は壊して来たわ。これで少しだけ行動し難くなった筈よ」

「そうか……」

すると天井から一匹の蜘蛛がバーサーカーの右肩に下りて来た。

「あら、どうだったかしら？……そうご苦労様。一緒に向かいましょうか……」

「何かあったのかい？」

「ええ、ランサー陣営のマスターの婚約者の確保に成功したのよ」

「何?!何故そのような事をしたバーサーカー!!」

「安心なさい。私も無益な殺生はしたくわれないわ。ただこの戦争から降りてもらったためにはこうした方が楽なのよ……」

「……本当に殺さないんだろうな？」

「ええ、殺しはしないわ。悪い事をしていたのなら話は別だが、今の所悪い事は一応して
いない様だからね」

「・・・なら任せるが、ミスするなよ」

「分かっているわ」

バーサーカーの返答を聞いて雁夜は寝室へと向かって行った。

「それじゃあ、私達も行きましょうか?」

そう言いながら蜘蛛を右肩に乗せながら蟲蔵に向かって行ったのだった。

☆・☆・☆

「こゝ、此処は・・・どこ、かしら?」

ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリは見覚えが無い所で目を覚ました。

「私は、確か……」

何故此処にいるのか思い出そうと過去を振り返るとツサと顔から色が抜けていった。

自身が多くの蟲から襲われたのを思い出したからである。

しかも自身の魔術も通じなかったのだから一種のトラウマになりかけている。

「どうにかして出ないと……」

脱出方法を考えていると闇の奥から声が聞こえてきた。

「あら、もう起きたのかしら？ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ……」

「誰ですか!？」

「ああ、貴方は私にあった事はないわね。こう言えばわかるかしら、私はバーサーカー
よ」

その返答にソウラは驚き、そして命の危機を感じ取った。

だがバーサーカーはこう言った。

「ああ、命を奪う気はないから安心しなさい。まあ、私の言葉を信用するかしらないかは自由
だけどね」

「だったら私を攫って何をしたいのですか!!」

「なくに、簡単よ。少しだけ貴方に芝居をうってもらっただけよ」

そう言いながらバーサーカーは自身の瞳を紅く光らせてソウラの瞳を見た。

「そう、簡単な芝居を、ね・・・」

バーサーカーが言い終えるのと同時にソラウは気絶した。

「ふふ、これで仕込みは完了ね。・・・貴方達」

その言葉と共に多くの蟲達が集まって来た。

その蟲達はソウラを攫って来た蟲達である。

「この女を元の場所付近に置いてきなさい！」

そう言われ蟲達はソウラを連れて蔵を後にした。

第拾話 宴の準備

昼の商店街・・・

そこにはサーヴアントの一人であるバーサーカーが歩いていった。

「ふん、後は豚肉を買えば終わりね」

「おや？お主、バーサーカーじゃないか！」

声を掛けられたバーサーカーはそちらを向くとライダー陣営の二人が居た。

「あら、ライダーとそのマスターじゃない。久しぶりね、何をしているのかしら？」

「それは此方のセリフなのだが・・・」

ちなみにライダーのマスターはライダーの後ろに隠れる様にして気絶している。

どうやらバーサーカーのオーラに耐えきれなかったようだ。

ちなみに一般人達にはオーラを抑えて話をしていく為気絶などはしないが、よくおまけを貰っている。

バーサーカーはライダーに言われたので手に持っている買い物袋を見せながら言った。

「私は見ての通り買い物よ。マスターは人前出るのが苦手（出る事が出来ない）だから私

が来ているのよ」

「ほう、ではお前さんは料理も出来るのか？」

「当然でしょう。今も昔も家事ができないと生きていけないし結婚する事は出来ないわよ。それよりアンタは何をしているのよ？」

「おお、答えていなかったな。余は今宵セイバー達の所に行つて王の問答をしようと思つてな！今はその為がいい酒がある場所を探しているところなのだ！」

ライダーの言葉にバーサーカーが反応した。

「ああ、アンタは知らないのね。セイバー陣営が拠点にしていた城は昨晚崩壊したわよ」
「何だと？そいつは困ったな。お前さん、セイバー達の居場所は知っているか？」

「知つてはいるわよ」

「それは真か！」

「ええ、本当よ。教えてもいいけど、条件があるわ・・・」

「まあ、タダではないよのう・・・。して、条件とは何じゃ？」

「簡単よ、その問答に私も参加させなさい」

その言葉を聞いてライダーは拍子抜けた顔になった。

「なんだ、それくらいなら構わないが、もしかしてお前さん・・・」

「ええ、一樣私は夜の王と呼ばれていたりするわ」

その言葉を聞いてライダーはバーサーカーから出ているオーラについて納得した。

このオーラはまさしく王のオーラなのだ……。

「そうか、参加してよいから場所を教えてくださいませんかバーサーカーよ？」

そう言われてバーサーカーは一枚の地図をライダーに投げ渡した。

「それに赤で印がつけられている場所がセイバー陣営が今拠点にしている場所よ」

「そうか、それじゃあまた夜に会おうぞ！」

そう言いながらマスターを連れてライダー陣営は人混みの中に去って行った。

「さて、予想外だけでももう少し材料を買いますかね。驚いてもらえそうだしね」

そう言いながらバーサーカーはお店に行く為に走って行った……

第拾壹話 集う王達

「塀を壊さずに庭に停止したことは感謝するが、何しに来たライダー！」

此処セイバー陣営が新たな拠点とした屋敷……

そこに夜空から自身の宝具に乗ってライダーがやって来て、その事でセイバーが叫んでいた。

「それより、何故この場所が分かった！」

「お？それはバーサーカーに聞いたからだか？」

「何だと!？」

昨晚、城を襲撃し爆破していった張本人が既に自身達の新たな拠点の場所を知っているのにセイバーは驚いた。

「そして今宵来たのは王としての問答をしようと思ったからだ！」

そう言いライダーは大きな酒樽を取り出した。

それを見たセイバーはフツツと笑い言った。

「いいだろう。受けてた立つ」

ライダーはそれを聞き豪快に笑って言った。

「そう来なくてわなあ。それと後から二人ほどやってくる手筈になっているが、先に始めるでしょうかのお」

そうして庭に移動してお互いが向き合う様にライダーとセイバーは座りあつた。

ちなみにセイバーの横にアイリスファイルが座り、ライダーの横にウェイバーが座っている。

酒樽をライダーは開けると手に何かを持つて言った。

「これがこの国の由緒正しき酒器だそうだ！」

しかし、ライダーが手に持っているのは柄杓。

それは酒器ではなく水撒きなどで使われる道具である。

だが、この場には日本の事をあまり知らない者達しかいないため突つ込まれなかつた。

と思つたが……

『それは違つてライダーよ』

「おお、この声はバーサーカーか！どこに居る？早く出て来い！」

その言葉と共にセイバーとライダーとの間ぐらの位置に幻覚が解ける様にしてバーサーカーが現れた。

「相変わらず奇妙な術をつかうのう、お主は……」

「ふふ、それが私よ」

そう言いながら横からスゴイ顔で睨んでいるセイバーに気付いて苦笑いをした。

「そう心配しなくても大丈夫よセイバー、今宵は問答をする為に此処に来たのだから……」

「……そうか」

渋々ながら納得したセイバーにバーサーカーはさらに苦笑いをした。

「それよりもバーサーカーよ、これは酒器ではないのか？」

「そうよ、本当の酒器はこの様な物を言うのよ」

そう言いバーサーカーはいくつかの酒器を取り出した。

「この木でできた四角の器が杵、円い器が杯、それより少し小さいのが御猪口よ」

「おお、これが酒器か！それじゃあこれは何なのだ？」

「それは柄杓と言つてね、汁物や水を器に盛る時なんかで使用するらしいわよ」

「そうだったのか、よく知っていたなバーサーカーよ」

「ふふ、これから戦う所の情報は集めて置くことは常識よ」

そう言いバーサーカーは席に着いた。

「そう言えば、私以外にもう一人来るそうだけど誰なのかしら？」

「おお、それはアーチャーの奴を誘つたのだ！」

それを聞きバーサーカーが少し反応した。

「そう、それじゃあもうそろそろ着くわね」

「何だと？」

「何か物が凄いスピードでこっちに向かって来ているわよ？てか、もう着くわ
そう言い終えると同時に黄金に輝く飛行船の様な物が現れた。

そこにはアーチャーが座っていた。

「久しいな雑種共、真の王が来てやったぞ」

第拾弐話 夜の王の所以

「それじゃあ、全員揃った様だし先ずは一杯やりましょうか……」

そう言いながらバーサーカーは杯を人数分だしてライダーに渡した。

「お、すまんなバーサーカー」

渡された杯にワインを盛り、皆に渡った。

そして全員ワインを呷ったが、アーチャーが顔を顰めた。

「何だこのワインは!?!不味すぎるぞ!!」

「そうか?この町では一番高いのを持ってきたのだが……」

「馬鹿者が、これこそが本当の酒という物だ」

そう言いながら酒が入った黄金色の瓶と黄金のグラスを黄金の波紋から取り出した。

その間にバーサーカーは徳利から日本酒を御猪口に注いで飲んでいた。

「おお、これは重畳!って、お主は何を飲んでおるのだバーサーカーよ?」

「うん?これは日本酒と言ってね、この国の酒よ」

「何と!我にも飲ませろ!!」

「構わないわよ」

パチンツ

バーサーカーが指を鳴らすと三人の前にスキマが開き、日本酒が入った徳利と御猪口が置かれた。

それを見てライダーもグラスにワインを注ぎ全員の前に置いた。

「それじゃあ早速……」

そう言い先ずは全員ワインを呷った。

「これは……」

「おお！美味しい！」

「口当たりが良いわね」

「そうであろう」

次に日本酒を全員呷った。

「うまいな、これは……」

「うむ、美味しいな！」

「ほおう、中々な味だな」

どうやら王達には中々受けは良いようだ。

「しかし何か料理が欲しくなるのう」

「確かにそうですね……」

「ふふふ、そう言うと思つて準備して置いたわよ」

パチンツ

バーサーカーが指を鳴らすと全員の真ん中に料理が置かれた。

ちなみに置かれた料理は塩茹でした枝豆、焼き鳥、おでんである。

「おお！美味そうじゃないか!!お前さんが作ったのか、バーサーカーよ?」

「そうよ、これくらい出来ないと私について来てくれていた者達に見せる顔が無いわ」

「む、そう言えばお前さんは夜の王と呼ばれていたようだが、どうしてそう呼ばれておつたのだ?」

「・・・そうだったのか?」

「その話は我も少し気になるな。話せ狂犬」

ライダーがバーサーカーに振つた話の内容にセイバーとアーチャーは興味を示した。

それを見て小さくため息を吐くとバーサーカーは話し始めた。

「そうね、先ずはその名は私から名乗つたのではないわ」

「何?」

「周りが言い始めたのよ。私に恐怖してね・・・」

「恐怖して・・・だと?」

「ふふふ、私には一人の妹が居たのよ。だけどあの子は特殊な力を持っていた。それを

狙って私以外の一族の皆があの子を攫おうとした。一族以外の周りに住んでいた者達も巻き込んでね……」

「それは……」

「確かによくあるだろうが……。まさかお前さんッ!」

「どうやらライダーは物語の結末を察したようだ。」

「そして、私は妹を狙ってやって来た者達を殺した」

それを聞きその場にいた者達は絶句した。あのアーチャーさえも……

「この出来事を聞いた他の者達が私に付けたのが夜の王よ」

「お主……。寂びしくわなかったのか?」

「ふふ、寂しいとは思わなかったわ。妹も居たし、私について来た者も居たからね。魔

女、従者、胡散臭い女、幼獣、科学者、他にも色々な者達がついて来た……」

「そうか……」

「……貴方の英霊になれたのは貴方の妹とついてきた者達が貴方の事を英雄の様に見ていたからかもしれませんね……」

「ふふふ、そうだといいのだけどね……」

セイバーの言葉を聞いたバーサーカーは少しだけ笑っていた様な気がした。

第拾参話 アサシンの末路

「それで、そろそろ出て来たらどうかしら？」

バーサーカーのその言葉にその場にいる者達は何の事か分からないという様な顔をした。

「どうしたんだバーサーカーよ」

「は？ああ、貴方達は気付いていないのね。この場を盗み見ている者がいるという事よ」

「何だと!？」

「ねえ、アサシン?」

そう言いバーサーカーは銀で出来たナイフを屋敷の屋根に向かって投げた。すると、ナイフが何かに弾き返されたと思うとその場にアサシンが現れた。

その姿を見てアーチャーを除いた者達は驚いた。

アサシンは一緒にいるアーチャーの手によつて殺られた筈だからだ。

「な、なんでアサシンが居るんだよ!?!彼奴はもう死んだ筈だろ!?!」

「どうやら、我らは彼奴等に一つ騙されていたようだな・・・」

ライダーの言葉と共に多くのアサシンが囲む様にして姿を現した。

「な、何でこんなにアサシンがいるんだよ!？」

『我らは軍にして個のサーヴァント、されど個にして軍の影』

ライダーのマスターの驚きにアサシンは答えた。

「つまりはあのアサシンは多重人格でその人格の数だけ実体を作れる事
出来るという事
よ」

「なるほどな。アーチャーよ、これはお前が仕組んだ事か？」

「ふん、我はこの様な美しくない事など命じはしないわ」

「それでは貴様のマスターの命令か」

「どうやらその様ね・・・」

「お前らそんな呑気に話してる場合じゃないだろ!？」

のんびり話をしているサーバント達にキレるライダーのマスター。

その言葉にライダーは動いた。

「まあ落ち着け坊主、器の大きさも王として必要だぞ。さあアサシン達よ、共に語ろうと
いう者はここに來て杯をとれ。この酒は貴様らの血と共にある」

その言葉に対してアサシンは杯を壊す事で答えた。

それにライダーは・・・

「……………余の言葉、聞き間違えたとは言わさんぞ? “この酒”は“貴様らの血”と

言った筈。そうか、敢えて地べたにブチ撒けたいというのならば、是非もない……」
そうしてライダーが動こうとしたがバーサーカーがそれを止めた。

「待ちなさいライダー」

「なんだバーサーカー、今我はこ奴らにお仕置きをしようと思っておるのだが……」
「それを私がやると言っているのよ」

「なんだと？」

「私も頭にキテるのよ。酒や道具を大事にしない奴は大嫌いなものよ……」

その言葉と共にバーサーカーからとてつもない殺気が放たれ始めた。

その殺気を受け、ライダーは素直に下がった。

「わ、わかった……」

「ありがとうライダー」

そう言いながらアサシンを見て言った。

「さくて、久しぶりに本気でいかせて貰うわよ」

バーサーカーがそう言った瞬間に、アサシン達の目の前には銀のナイフが大量に投げられていた。

『『『っな?!』』』

アサシンは驚きながらも自身の持つダガーで弾いて対処した。

だが、対処できずに二人のアサシンが消えた。

「WRYYYYYYYYY!!最高にハイ!ってヤツだ!!」

バーサーカーに対して八人のアサシンが飛ぶ掛かったが、一瞬の内にバーサーカーはその後ろに回り込んでいた。

そして、その八人の脳天にナイフを刺した。

その後、残りのアサシンに対して言った。

「無駄無駄!貴様らはチェスや将棋でいうチェックメイトに嵌ったのだ!!」

その宣言と共に残りのアサシン達の脳天にもナイフが刺さっており、アサシンは脱落した。

第拾肆話 来訪者との戦闘

この場に居た皆が驚いた。

アサシンとはいえあれほどの人数をこんなにも早く片付けてしまったのだから。

「おお、お前さんなかなかやるではないか!!」

「ふふ、あれくらい私にとつては赤子を殺すより楽な作業よ」

ライダーの褒め言葉に対してバーサーカーは冷たく返した。

「それよりも、今宵は来客が多いらしいわね」

「何？」

「どう言う事だバーサーカーよ？」

「つふん」

「あら、気付いてないの？あと一つの陣営がこの場に居る事に・・・ねえ、ランサー？」

その言葉と共にランサーが塀の上に現れた。

「気づいていたのかバーサーカー・・・」

「当然でしょう。これくらいならすぐに気づきわ」

そう言いバーサーカーはランサーと向かい合う様に立った。

「貴方達、手出しは無用よ。これは私と彼の戦いよ」

「・・・分かった」

「おう、分かっている」

「ふん、精々我を享受させよ」

そう言ったのを確認してランサーへと語りかけた。

「久しぶりねランサー・・・」

「そうだな、今宵はあの夜の戦いの続きをしに来た」

「よく貴方のマスターは許可したわね？」

「そうかもしれないが、今はお前と戦うのが俺の任務だ」

「そう、勝利条件は相手を殺したら勝ちでいいわね」

「ああ・・・」

その返事を聞きバーサーカーは手元に槍を出現させた。

「一応言っておくわ。私は槍以外も使って戦うわよ」

「構わない。これは死合いだ、生き残った者が勝者で死んだ者が敗者だ」

「ふふ、だったらこれが地面に着いたらスタートよ」

そう言いコインを一つ出して上へと弾いた。

そしてコインが地面に着いた瞬間にお互いに距離を詰め、槍を交えた。

ツキン ツキン ツガキン

ツキン ツガキン ツキン

何度か槍を交えた後、お互いに距離を取った。

「火符「アグニシャイン」!!」

それと共にバーサーカーが炎の弾幕を放ち始めた。

それをランサーはギリギリながら躲していく。

「つち! やりづらいな・・・」

「だったら、これならどうよ! 水符「プリンセスウンディネ」!!」

今度は水の弾幕が放たれ始めた。

ランサーは自身の槍で対応しながら防ぎ切った。

「・・・はあ、はあ、はあ」

「あら? もう息切れかしら?」

「まだまだ! 俺はまだ戦える!!」

その返事を聞きバーサーカーは顔に笑みを浮かべた。

「そこなくったね! 不死「火の鳥 — 鳳翼天翔 —」!!」

バーサーカーの掛け声と共に鳥の形をした炎の弾幕が放たれた。

その弾幕を避けてランサーはバーサーカーに接近して短槍の必滅ゲイの黄薔薇ポウで斬り付

けた。

その傷は治り事はないのだが、バーサーカーはその傷を扶るようにして自身で斬り裂いた。

「な、何故そのような事を!?!」

ランサーの叫びが響いたのと同時にバーサーカーの傷は完全に直っていた。

「何だと!?!」

「ふふふ、私は死なないのよ!死蝶「華胥の永眠」!!」

バーサーカーから蝶の形をした弾幕が放たれ始めた。

第拾伍話 戦鬪の決着

ランサーはバーサーカーの弾幕を自身の速さを活かして躲していく。

それを見てバーサーカーはニヤリと笑った。

「これも躲すか！ だったら合わせ技で行くわよ!! 魍魎 「二重反魂結界く黒死蝶く」!!」

それと同時にランサーを囲う様に結界が現れ、黒色の蝶型の弾幕が舞い始めた。

その蝶が触れた所はそこだけが死んだように灰になっていった。

それを見てランサーは触れない様に躲しながら、結界に近づき破魔の紅薔薇で斬り付けることで結界を破壊した。

「ハハ、やるではないかランサーよ!!」

バーサーカーの言葉を聞きながらランサーは駆けた。

その勢いのままバーサーカーへと近づき、必滅の黄薔薇で心臓部を貫こうとした。

何故かと言うと、先ほどバーサーカーは必滅の黄薔薇で出来た傷を無くすようにしてから傷が癒えた。

ならば、なくせない所で一撃で仕留める事ができる場所である心臓部を突けば良いとランサーは思ったのだ。

「なにっ!？」

だが、槍がバーサーカーを貫いたと思つた瞬間にバーサーカーが消えた。

そしてバーサーカーの聲が周りから聞こえてきた。

「教えてやろう………。たつた今貴様が目撃し触れたものは未来のお前自身だ。終わらせてやろう……。」

その言葉を聞いたと共に自身の身体が何かに貫かれたのを感じた。

そこをみたみるとバーサーカーが持つていた槍であつた。

「ツガハ！」

「中々楽しめたぞ。誇るがいい、*「輝く貌」*の異名を持つファイオナ騎士団の戦士である

デイルムツド・オディナよ……。」

「つふ、主よ申し訳ありません……。」

その言葉と共にランサーは消えた、いやリタイアとなつた。

「……待たせたわね。話の続きをしましょうか……。」

そう言いながらバーサーカーは王達の席へと戻るのだった。

☆・☆・☆・

その様子を陰で見っていた切嗣は動揺していた。

あのコンテナ街での夜から思っていたがバーサーカーの正体が分からないのである。

それなのに、今宵の様子を見ていて実際に実力を感じた。

そして思った……あれにセイバーは勝てないであろう。

それに向こうはある程度の情報、陣営の位置を知っているとも思われる。

それについてはある程度予想がついている。

おそらく蟲や蝙蝠を使って監視をしているのだろう。

これについては対処するのが難しい……

蟲は何処にでも存在するのだから……

そう思いながら切嗣はこれからの事について考え始めるのだった……

第拾陸話 終わる宴

「ふう、今日は疲れるわね」

そう言いながら自身が座っていた場所に戻ったバーサーカー。

「さて、話しの続きをしようかのう」

そう言いながらそろそろその杯に酒を注いで配った。

「それじゃあ、それぞれ自身の願いを語ろうではないか」

「先ずはお前から言ったらどうだ。征服王よ」

「うむ、それもそうじゃのう。我が願いは受肉だ!!」

『……はあ!?!』

ライダーの言葉にバーサーカー以外は驚いた。

「お前、世界征服するのが願いじゃないのかよ!!」

「バカもん。その様に世界を手に入れてもつまらないであろうが」

「ふふ、私は貴方らしい答えだと思うけど?」

「確かに、こ奴から感じるオーラはその様な感じだな」

「次はアーチャーよ、お前は何故聖杯を求めめるのだ?」

その質問にアーチャーは当然というように答えた。

「それは聖杯は我の物だからだ」

『……はい？』

「これまたバーサーカー以外は驚いた。

「聖杯など知らないが宝であるからには自分のものに違いないのだ！」

「はあ、流石は自分で真の王と言っているだけの事はあるわね。趣味でお宝集めでもしていたのかしら？」

「ああ、確かにしていただ。それがどうした？」

「だったら貴方の理由は聖杯と言うお宝を自身の物にする為に参加した、でいいんじゃないの？」

そう言われてアーチャーは少し考えると答えた。

「確かに、昔集めきれていなかったのかもしれないな。だったら我の理由はそれにしよう」
「そうか、お主は趣味の為に参加したのか……。それじゃあ、セイバーよ。今度はお前の番だぞ」

そう言われ、待っていたという様にセイバーは言った。

「私は、我が故郷の救済を願う。万能の願望機をもってして、ブリテンの滅びの運命を変える。それが私の願いだ」

その言葉に周りの皆は驚いた。バーサーカーすら驚いていた。

「それはダメよ、セイバー……」

「どう言う事だバーサーカー……」

「今回はその女の言う通りだぞ、セイバーよ」

「その通りだぞ、セイバー」

セイバー以外の三人のサーバントがセイバーの意見を否定した。

「セイバー、過去を変える事はやってはいけない事なのよ」

「何故だ！私は国の民を思って！」

「過去を変える事で今、この現代を生きている人々全ての人生が犠牲になったとしても

？」

「なんだと？」

分からないという様な顔をしたセイバーにバーサーカーは説明した。

「タイムパラドックスをしっているかしら、セイバー？」

「知らんな、何の事だ？」

「タイムパラドックスというのは過去に対して干渉したことにより違う未来になってし

まう事よ」

「それで良いではないか」

「貴方は馬鹿かしら？ そうなったらいけないのよ」

「それは何故だ！」

「じゃあ、今の人達はどうなるのかしらね？」

「それは・・・っは！」

「漸く理解した様ねセイバー。そう、今の人達は過去が変わった事により、死んでしまったり、生まれなかったりという矛盾が生まれてしまうのよ」

「それでも・・・私は・・・」

ぶつぶつ呟いているセイバーを見てアイリスフィールは心配して駆け寄った。その様子を見てバーサーカーはため息を吐いた。

「はあ、今回はこれまでにしましょうか。ライダーにアーチャー？」

「そうだな。今宵は仕舞にしようかの」

「ふん、そうだな」

そう言いライダー、アーチャー、バーサーカーは立ち上がった。

「おっとそういえばお前さんの願いを聞いていなかったの、バーサーカーよ」

「そう言えばそうであつたな」

「・・・私の願い事はライダーと同じ受肉よ」

そう言うときバーサーカーの体が散ってその場から姿を消した。

「おい、坊主。我らもそろそろ帰るぞ」

「あ、ああ……」

ライダーもマスターを連れてその場を去った。

「ふん……」

アーチャーは最後にセイバーを一目見ると霊体化しその場を去った。

「私は……私は、それでも……」

「落ち着いて、セイバー!!」

そしてその場には死んだ魚の様な目をしてぶつぶつぶやいているセイバーとそれを元に戻そうとしているアイリスフィールが残っていた。

第拾漆話 暗躍するサーヴァント十α

間桐の屋敷に屋根の上・・・

そこにはバーサーカーが目を瞑って立っていた。

すると、そこに一匹の雀蜂が飛んで来てバーサーカーの肩に止まった。

「どうした・・・そうか、彼奴が死んだか・・・ああ、下がってよいぞ」

バーサーカーがそう言うのと雀蜂はその場を去って行った。

「さて、彼奴の所へ向かうとするか。うまく行けばこの聖杯戦争に勝つ事ができる・・・」
そう言いながらバーサーカーは自身の身体を蝙蝠にして夜の闇へと消えて行つた・・・

☆・☆・☆

夜の教会……

そこには言峰綺礼は立っていた。

そして、そのすぐ傍には遠坂時臣のサーヴァントの笈のアーチャーが立っていた。

「さて、これからどうするか……」

「ふん、何かやるにして我を楽しませろよ綺礼よ」

『ふふふ、私が協力してあげましょうか?』

そう言葉が教会に響いたと思うと一つの椅子にバーサーカーが座っていた。

「ほう、私の前によく表れたな狂犬。昨日は王の問答だったから許したが今宵は許さん

ぞ?」

「まあ、落ち着きなさいアーチャー。貴方にもいい話の筈よ?」

「何だと?……いいだろう、話してみろ」

アーチャーの言葉を聞いてバーサーカーは綺礼を見た。

綺礼は黙ってバーサーカーを見ていた。

「どうやら話を聞くつもりらしい……」

「ふふ、言峰綺礼。貴方……衛宮切嗣と戦いたいと思っただけでしょ?」

「っ!?!」

バーサーカーの言葉に綺礼は驚いた。

それは自身が思っていた事を当てられたからだ。

「そしてアーチャー、貴方はセイバーが気になっているのでしょうか？」

「ほう、狂犬の癖によく分かったな」

アーチャーの言葉を確認してバーサーカーは話を続けた。

「だったら私がそれぞれ戦えるように場を作つてあげるわ」

そう言いバーサーカーは悪い顔をした。

☆★オマケ☆☆

聖杯戦争が終盤を迎えようとする中、ランサーがやられてしまったケイネスとソウラの二人はというと……

「ケイネス！早く早く!!」

「そう急ぐことはないではないかソラウよー」

町の中をデートしていた。

しかし、ランサーの呪いは溶けているとしても、元々仲が悪かった筈の二人が何故この様に仲良くしているのかというと、それはバーサーカーの所為である。

ソラウがバーサーカーに誘拐された時にソウラはランサーに向けていた好意をケイネスに向けてようにバーサーカーに仕組まれていたのだ。

なので、ケイネスとソラウは仲がいいのである。

しかし、バーサーカーはそれだけをソラウに仕向けたのではない。

ランサーの意思を尊重するようにケイネスに言う様にもしていたのだ。

なのであの夜にランサーは戦う事ができたのだ。

そして、聖杯戦争は失格になってしまった訳だがケイネスは気にしていなかった。

それはソウラと仲良くなれ、楽しむ事ができているからである。

もう、聖杯戦争の事はケイネスの頭の中には存在せず、ソラウと楽しむことしかなかった。

なんだかんだで、幸せになっている二人だった。

第拾捌話 聖杯戦争終了へのカウントダウン

夜のセイバー陣営の屋敷・・・

その蔵ではアイリスフィールが魔法陣の上で横たわっていた。

その傍に切嗣のサポートしている女性が立っていた。

「奥様・・・」

「いいのよ、遅かれ早かれこうなる運命だったのよ・・・」

その様な会話をしていると、周りが毒々しい煙で覆われた。

「っ?!奥様吸ってはいけません!?!」

その煙の正体に気が付いた女性はアイリスフィールに注意を促しながら自身も吸わない様に口を袖で覆った。

だが、その後女性の後ろに現れた者に当て身をされて気絶してしまった。

「っう!?!・・・(ドサツ)」

「ふふ、周りの注意を怠ってはいけないわよ?」

「っ!バーサーカー・・・」

アイリスフィールはその者の姿を見て睨んだ。

そのアイリスフィールを見てもバーサーカーは余裕の態度を取っていた。

「良いのかしら？ 私目をそんなに見つめても……」

そう言いながらバーサーカーは自身の目を紅色に輝かせ始めた。

それに気づき不味いとアイリスフィールは思ったが既に遅く、意識が遠くへと行ってしまった。

そのアイリスフィールをバーサーカーは方へと担ぎ、スキマを開き潜り抜けて行った。

その時に気絶している女性の傍に手紙を置いて……

☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆
☆

「ツ何!? アイリが誘拐されただど!」

とあるアパートで生活していた切嗣は自身の相棒とも言える女性からの報告を聞き、動揺していた。

『すいません。抵抗できないまま気絶させられてしまいました。その間に奥様は……』

「……そうか」

『それと、私の傍に手紙が置いてありました』

「……何だと? 読んでみてくれ」

『今夜00:00にて狼煙の下で待つ……との事です』

「……分かった。引き続きアイリを探してくれ」

『了解しました』

そうして通話を終えて切嗣はこのような事をする者が誰なのかを考えた。

そして一人の人物に思い至った。

「言峰綺礼……彼奴か……」

だが、切嗣は知らなかった。

その人物は一人の役者であり、本当の黒幕が違う人物である事を……

☆・☆・☆・☆・☆・

「後は予定通りに行動すれば貴方達が戦いたい相手と戦える筈よ。アーチャーに言峰綺礼……」

「了解したバーサーカー」

「ふん、狂犬にしては良くやったと言ってやる」

「バーサーカーの言葉に返答しながら言峰は聖杯戦争の終了を告げる際にあげる狼煙をあげた。」

「それじゃあ、私はライダーと戦ってくるわ」

「そう言いバーサーカーはその場から消えて行った。」

「アーチャー、私は切嗣の対戦に向かわせてもらおう」

「構わん。我もセイバーと戦いに向かうからな……」

そう言いながら言峰とアーチャーはそれぞれ違う方向に向かって行った……

☆・☆・☆

そして……

「さあ、戦いましょうかライダー……」

「ふむ、良かろうバーサーカーよ！」

「セイバーよ、貴様の騎士としてのあり方を我の前で貫いてみせよ」

「そこを退いてもらどうぞアーチャー!!」

「待っていたぞ衛宮切嗣……」

「言峰……綺礼っ！」

それぞれ戦う相手と相対したのだった……

第拾玖話 バーサーカーVSライダー（1）

「さて、坊主よしつかり纏まっておれよ。これより先は本気で行かなくてはならんからな・・・」

「分かった・・・」

ライダー陣營の様子を見ていてバーサーカーは話した。

「どうやら貴様のマスターはこの短い間に成長した様だな」

「ほう、分かるかバーサーカーよ」

「当然だ、一人一人の変化に気が付かなくては王としてやっていけんからな」

「はは！そうだな!!」

ライダーの返答を聞きバーサーカーは真剣な顔になった。

「さて、ライダーよ。貴様の宝具はその戦車だけではないであろう。今宵は私も本気で行かせてもらう、貴様も本気で来い・・・」

それを聞きライダーは腰に納めてあった剣を抜き、天へと掲げた。

「ならば見せてやろう。我の最強宝具を!!」

その言葉と共に周りは光に包まれた。

そして光が収まると辺り一帯が砂漠になっていた。

「ほう、心象風景の具現化か。魔術師でない貴様がよく再現出来た物だ……」

「ふふん、確かに我一人ではできないものではない。だが、此処はかつて我が軍が駆け抜け、戦った場所だ!!」

その掛け声と共にライダーの後ろの方から地響きが聞こえて来た。

「見よ、我が無双の軍勢を！ 肉体は滅び、その魂は英霊として『世界』に召し上げられて、それでもなお余に忠義する伝説の勇者たち。時空を超えて我が召喚に応じる永遠の朋友たち。彼らとの絆こそ我が至宝！ 我が王道！ イスカンダルたる余が誇る最強宝具、

『王アイオニオン、ハタイロイの軍勢』なり!!」

『ウオオオオオオオオオオオオ!!!』

その場所から多くの人間が現れライダーの言葉に雄叫びを上げた。

その光景を見てパーサーカーは顔に笑みを浮かべた。

そしてライダーは兵達の方へ向き直り……

「王とは——誰よりも鮮烈に生き、諸人を魅せる姿を指す言葉！ すべての勇者の羨望を束ね、その道標として立つ者こそが、王！ 故に、王は孤高にあらず。その偉志は、すべての臣民の志の総算たるが故に!!」

『『然り！ 然り！ 然り！』』

英霊たちの斉唱が大地を揺るがし、大音声の波が圧力を持って鼓膜を叩く。騎兵が、歩兵が、一齐に盾を太鼓のように打ち鳴らして歓呼する。

蒼天の彼方まで突き抜けていく金属の大合唱が地の果てまで響き渡った。

「さて、では始めるかバーサーカーよ見ての通り、我らが具現化した戦場は平野。生憎だが、数で勝るこちらに地の利はあるぞ？」

「素晴らしいわイスカンドル。この人数のサーバントを束ねる事が出来るカリスマ性が有ってからこそ出来るのであろう。ならば、私も最強の宝具を使うとしよう・・・」

「・・・なんだと」

その言葉にライダーは動揺した。

今の状態のバーサーカーでもこの数で押して勝てるかどうかと考えていたのにも関わらず、バーサーカーがまだ奥の手を残していた為である。

そしてバーサーカーの周りに視認できるほどの紅色の魔力が集まり始め・・・

「さあ見るがいいライダーとその兵達よ！これこそが私の最強宝具だ!!」

そのバーサーカーの掛け声と共に紅い魔力が輝きこの場にいる者全ての視界を奪った。

そして視界が戻って見たものは、場所は先程と同じ砂漠である。ある一つの事を除いて・・・

「なッ!?空が夜に変わっている!!?それに何なんだ!あの紅い月は?!?」

そう、先ほどまで太陽の光が照らしていたはずなのに、今は太陽の代わりに紅い月が空にあり、大地を照らしていた。

「これが貴様の最強宝具かバーサーカーよ?」

「そう、これこそが私の最強宝具、『紅い月の夜』よ。そして能力は私の能力を大幅に強化する事・・・」

そしてバーサーカーは空へと飛び、ライダー達を見渡して言い放った。

「さあ、こんなに月が紅いものだから、楽しい夜になりそうね!!」

第貳拾話 バースーカーVSライダー（2）

「蹂躪せよおお!!」

『ウオオオオオおおおオオオオ!!!』

ライダーの宣言を聞き兵士達が掛け声と共にバースーカーへと進軍し始めた。

それを見たバースーカーは・・・

「先ずはこれで行かせてもらおうわよ。廃線「ふらり廃駅下車の旅」グオレンダア!!」

そのバースーカーの宣言後、兵士達の前にスキマが5つ開き、そこから錆びれた電車が飛び出して来て兵士達へと向かって行った。

「な、ばかな!?!彼奴、近代の物も操れるのか!?!」

「避ける!!」

ライダーのマスターはそれを見て動揺したが、ライダーはすぐに兵へと指示を出した。

しかし、ライダーの指示は間に合わず約2割の兵士達が跳ね飛ばされてこの場から消えて行った。

だが、兵士達も負けずと槍をバースーカーへと投げ、攻撃し始めた。

それをバーサーカーは笑みを浮かべ、回避しながらこう言った。

「今宵は聖杯戦争の最終日となる日だ。故にお前達は私のスペルで葬ってやろう！木符「シルフィホルン」！土符「レイジトリリトン」！金符「メタルファティーク」！！」
そう宣言をするとバーサーカーは兵士達に向かい風・土・金でできた弾幕を飛ばし始めた。

『グハア!?』『ゴハア!?』『クソオオ!?』『ウソダンドコドーン!?』『タコス!?』
「あら？今、不自然な叫び声が聞こえた様な気が・・・気のせいか。まあ、そんなことよ
り・・・」

『アラララララララアアアイイ!!!』

「ライダーの相手もしないとね、火水木金土符「賢者の石」!!」

兵士達の相手をしている間にライダーが空から接近してきたのを確認したバーサーカーはスペルを宣言した。

それと共にバーサーカーの真上に紅に輝く巨石が現れ、火・水・風・金・土の弾幕を放ち始めた。

それを見たライダーは進行ルートを変えて弾幕を躲すが、地面の兵士に流れ弾が当たってしまう。

すると背景が少しずつ歪み始めた。

「拙い！このままだと結界が持たないぞ！」

「わかっとなるわい！！」

「あら、賢者の石の弾幕を躲しているのに会話する余裕があるのね。だったら追加よ、
「遊星より弾幕X」！！」

会話をしていたライダー陣営を見てバーサーカーは、新たなスペルを宣言し、自身の
周りから○？△□の形をした弾幕を反時計回りで放った。

それを見たライダーは真剣な表情になり・・・

「坊主、しっかり掴まってるよ！！このまま突っ込むぞ！！」ヴィア・エクスブグナテイオ「遙かなる蹂躞制覇」！！」

「そんな！無茶なああああああああああ！！」

マスターの叫び声を聞きながら、ライダーはバーサーカーへと突き進んだ・・・

第貳拾壹話 聖杯戦争終結

「クツ、聖杯が汚染されていたなんて……。アインツベルン家、知っていて黙っていたな!!」

そう言いながら綺礼との戦いを終えた切嗣は聖杯があり、セイバーが戦っている場所へと向かった。

「汚染されているからには、聖杯を破壊するしかないな。すまない、アイリ……。」
心の中で切嗣はアイリスフィールに謝りながら歩を進め、聖杯がある場所の扉から中の様子を窺った。

そこにはアーチャーのギルガメッシュと言いつ争っているセイバーがいた。

「(まだ、こちらには気づいていないようだな。今の内に……。)」

そう考えながら令呪に手を添えようとした時……

『それを許すわけには行かないわね』

「っ!？」

声を聞き切嗣は急いで振り返ったが、そこには誰もいなかった。

「(今の声は間違いなくバーサーカーの声だった。だが、彼奴はライダーと戦っていると

舞弥から報告がきていた。何故此処にいる!？」

ドシユツ

影から矢が放たれ、切嗣の背に刺さった。切嗣はコンテンサーを後ろに向けようとしたが、身体がふらつき始めた。

「クツ、油断し、た．．．か．．．」ドサツ

「．．．ふう、矢に薬を塗って置いてよかつたわ」

そう、言いながらバーサーカーはクロスボウを持ちながら姿を現した。

矢にはバーサーカー特製の吸血鬼でも、受けると一日寝てしまうほどの薬が塗られていたのだ。

パチンツ

バーサーカーが指を鳴らすと、切嗣の下にスキマが開かれて何処かへ消えて行った。

「さて、仕上げと行きましょうか．．．．．」

☆・☆・☆・☆・☆

「こうなつたら無理やりにでも」　グサツ

ギルガメツシュがセイバーを無理やりにでも自身のものにしようとした時、後ろから深紅の槍で胸を貫かれた。

「なッ!？」

セイバーが驚いた声をあげると、舞台蔭からからバーサーカーが姿を現した。

それを確認したギルガメツシュは怒りと驚愕が混ざつたような表情を浮かべた。

「き、貴様、ライダーの相手を、していたのでは、ないのか!？」

「あら、ライダーとの戦いが終わったから此処にいるのよアーチャー……。それと、時間切れアーチャー。さようなら……。」

バーサーカーがそう言うのと光り輝く蝶の大群が舞い上がりギルガメツシュへと向かい始めた。

ギルガメツシュも対抗しようとするが、胸から血が流れ過ぎて力が入らず、蝶に触れられてしまった。

そこからギルガメッシュの体が生命を失ったかのように崩壊を始めた。

「……クツ、お……おぼえて……いろよ、バー……サー、カー!!」

そう言い残しギルガメッシュは消えた。

それを見届けたバーサーカーはセイバーの方へと振り向いて言った。

「き、貴様!!」

「ふふふ、あなたの記憶に新たなトラウマを刻んであげる。想起「恐怖催眠術」……」

バーサーカーの胸元に浮いていた目玉が怪しく輝いたと思うとセイバーは気絶してしまつた。

それを確認したバーサーカーは聖杯の方に向くと黒い何かによつてあふれていた。

「なるほど、これが汚染された聖杯か。道理で私の様な者が参加する事が出来たわけだ。だが、これで私の願いは叶う……」

そう言いながらバーサーカーは聖杯に触れた。

☆・☆・☆

バーサーカーは気が付くと周りに何も無い白い空間が広がっていた。

そこに見覚えのある人物が立っていた。

『久しぶりだな、楓馬優奈……』

「あら、ロキさん。この空間に私がいるという事は……」

『ああ、受肉してあの世界で生活できるようになる』

「そうですか、よかった……。あ、あの汚染された聖杯はどうなるのかしら？」

『ああ、それならお前を受肉させる為に使用されるから大丈夫だ。お前の身体にも問題は無い……』

それを聞き優奈はあんどのため息を吐いた

『それと伝えて置く事がある。受肉するにあたって種族は人間として受肉させる。だから背中の中の羽がなくなつて空が飛べなくなる』

「わかりました」

ロキはそれを確認すると優奈の後ろに光の門を出現させた。

『それじゃあ、後の人生を楽しみたまえ』

「ええ、楽しませてもらうわ」

そう言い優奈は光の門を潜った・・・・・・・・

第貳拾貳話 エピローグ

日本の地方都市・冬木市で行われた聖杯戦争の後日談を語るとしよう・・・

衛宮切嗣は令呪が無くなっているのを確認すると舞弥と共に自身の子どもであるイリヤスフィールをアインツベルン城から連れて何処かに姿を消してしまった。今ごろ、何処かで傭兵の仕事をしていると思われる・・・。

セイバーであるアルトリア・ペンドラゴンはレミアアの受肉に巻き込まれる様に受肉してしまい、その状態で倒れているのをケイネス・エルメロイ・アーチボルトとソラウ・ヌアザレ・ソフィアりに発見され、その後は二人の下で働いているらしい・・・

ウェイバー・ベルベツトは、ライダーが脱落した時に、レミアアによつてケイネス・エルメロイ・アーチボルトの下へと送られ、保護された。その後は、時計塔で魔術の勉強に勤しみながら、ケイネスへの恩を返しているらしい・・・

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、レミアアの御蔭で婚約者であるソラウ・ヌアザレ・ソフィアリとの関係は順調であり、周りの者に優しくなった。そのため時計塔では1, 2を争う人気教師となっているらしい・・・

言峰綺礼は、自身の生きる意味を見失いかけている時に、中華料理店で食べた麻婆豆

腐に感激し、その店の店主に弟子入りをして中華の道を歩み始めているらしい・・・

言峰綺礼の父親である言峰璃正は、自身の息子が新たな道に積極的に進み始めている事に喜びながら、遠坂時臣の死を悲しんでる。今は、教会の神父を続けているが、息子が独立したら、手伝おうと思っている。

遠坂葵は、夫である遠坂時臣の死にショックを受けたが、言峰璃正の支えもあり立ち直った。娘である凜をしっかりと育てる事を決意を新たにした。

間桐雁夜は、レミリアの御蔭で間桐臓硯の手解きを受ける前の健康な体に戻る事が出来た。

間桐桜も、心のケアが終わり普通の子どもの様な笑顔を浮かべるようになった。

そしてレミリアはと言うと・・・

「○○さんどうぞ〜」「は、はい・・・」

冬木市内にあるとある病院・・・

そこでレミリアは自身の能力を利用して患者のメンタルケアをする仕事についていた。

「ほんごちは○○さん」

生きている者の役に立ちたいとおもったレミリアは、相手の心を知る事が出来るため、患者が社会復帰させやすいと思ったためこの職で働き始めた。

家はというと、まだ間桐家に世話になっている。

いや、世話になつてゐるではなく、家族となつたと言ふべきか・・・

仕事を終えたレミリアが間桐家に帰宅すると、間桐雁夜が玄関へとやつて来た。

「ただいま雁夜」

「御帰りレミリア」

そう言い二人はキスをした。

聖杯戦争後、レミリアの名前は間桐レミリアへとなつていた。

そう、二人は結婚をしたのだ。

間桐家はレミリアと雁夜、桜の三人で幸せに暮らしたのでした。

く 完 く